

---

# R P G始めました

空雲雛太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

RPG始めました

### 【Nコード】

N4821W

### 【作者名】

空雲雛太

### 【あらすじ】

新しい妹が増えた。

感情の読めない表情で、彼女はこう言った。

「初めましてマスター。私に名前をください」

これは、風車に戦いを挑んだ滑稽な道化の喜劇を、面白おかしく綴った物語。

## プロローグ

この物語は活劇ではなく喜劇だ。

春風 薫（はるかぜかおる）は俺の通う暁高校の有名な人だ。もつとも、それは頭がいいとか運動ができるとかではない。

春風 薫という女生徒はその性格が有名なのだ。重度のお人好しにして、極度のお節介。

それが入学からたったの1週間で名を馳せた春風 薫のキャラクターだ。通りすがりのおばあちゃんの荷物

を持つとか、家無き人に仕事を紹介したとか、自分を殺そうとした殺人未遂犯の裁判に弁護側で出席したとか。そして、

そんな噂（百歩譲って二番目はともかく、さすがに三番目は嘘だろう）に真実味をもたらず、彼女の親切への執着。誰に

でも分け隔てなく、誰であれ優しく接するという彼女の逸脱ぶりは、もはや校内に知らない者はいなかった。とはい

え、本人の前で困ったりしなれば実に無害であったし、頼めば掃除当番、黒板消し、ゴミ捨てにプリント運びと、皆が嫌がる雑用でも嬉々としてやってくれるので、教員を含めた全員に重宝されていた（彼女の乱用を防ぐための委員会が設立されたほどだ）。

そんな彼女の前である日、不覚にも俺は困ってしまった。そのせいで俺は、荒唐無稽な

事件に巻き込まれていくことになる。いや、この言い方はきつと正しくない。発端は俺の間抜けな失敗だし、

巻き込まれたというより勝手に首を突っ込んだと言ったほうが正しいと思う。そもそも事件など最初から起き

ていないとさえ言えるだろう。だからこれは、きつと風車に戦いを挑んだ、滑稽な道化を描いた喜劇なのだ。

## 昆布を食べるとハゲにならないって本当？

「あれ？おつかしいな…」「うん？どうしたの淋漓（りんり）？早くお昼ご飯食べようよ」「いや、その昼メシがねーんだよ」

楽しくて仕方がなかった4時間目の現国の授業が終わり、さあ昼メシにしようとした矢先のことだった。何度も鞆の中を確認しても、やっぱり弁当がない。ただ、こういうことは以前にもあったので、白状しろという意味で最有力容疑者を睨み付ける。容疑者もそのことに気付いたらしく、2つに結んだ髪を揺らしながら大袈裟に反応した。

「むむ！？にーちゃんから疑いの眼差しを感じる！！」「お前には前科があるからな」「まったくひどいなア1週間に1回のペースで盗み食いしてたからって…。」

そんだけの前科があれば容疑で済ませている俺は優しいほうだと思っ。「クロちゃんも何か言ってるよ〜」そう言って妹のぐみは、俺の向かいに座っている男子生徒に同意を求め。「そんだけ前科があつたら疑われても仕方ないんじゃないかな…。」「まさかの四面素麺！？」「夏場なんかは良さげだな」

四面楚歌と言いたいのだろう。頭の悪い妹は少し唸ったあと、勢いよく右手を上げた。「異議あり！今回の現場は明らかにこれまでと手口が違います隊長！」「裁判官が隊長なのか」

「なかなかシユールな絵だ。」「確かにぐみ（漢字があるのだがダルいのでひらがな表記で統一）の言い分にも一理ある。これまでの《強欲な捕食者》（食事どきのぐみはこう呼ばれる）の手口は「人の弁当を無断で半分近く喰い漁る」というものだった。

今回のケースは、弁当箱そのものがないのだ。つまり、普通に俺の過失である可能性がある。「いやーあたしも盗み食

いしようとしたらお弁当がなくてびっくりしたよ」「お前よく自分の無罪を主張できたな」「だって食べてないもん」

「午後 0時37分、盗み食い未遂で逮捕」 「オナカガスイテツイ：ハンセイシテイマス」

俺がテキトーな罪状を読み上げ、ぐみに変な声（おそらくボイスチェンジャーを表現していると思われる）で謝罪する。

半ば恒例となったやり取りを終え、いつもならこのままいただきますなのだけれど、今日はそのいただく弁当がない。

「はーあ…どーすっかなー」 「購

買は？ご飯がないじゃ、仕方ないよ」 「いやでもよ…腹

が減ったぐらいじゃ食えねーだろあれは」 「あ

ー…まあ、そうかも」 苦笑いを浮かべ、俺に同意する黒兎（こくと）。うちの高校は購買部の利用者が多く、まともなメニューは昼休み開始から5分で消える。では残ったメニューはま

ともじゃないのかといえはその通りだ。 我が校の購

買部は実に開拓者精神に溢れており、通常メニュー売後は蠅（

さそり）サンドとかエスカルゴのおにぎりとかカブトムシステイ

ックとかいった不思議の国のキテレツメニューがずらりと並んでいる。果敢に挑戦したやつ（の証言を信じるのなら「キテレツなのは

見た目だけ」とのことだが） まあそうでなければ何のための購買だという話だが、俺は遭難でもしない限り食べたいとは思えな

かった。 ちなみにうちの高校に食堂はない。

「となると兄ちゃんはお昼抜き？」 「お

前いつも俺の弁当盗み食いしてるんだから、今日ぐらい俺に譲れ」

「なぜ盗み食いをするのか…。それはこれじゃ足りないからなのさっ！」 前半はかっこつけ風に喋っていたが後半は

飽きたのかかっこつけていたのを忘れたのかいつものテンションだ。

たぶん両方だろう。 「じゃあ僕のお弁当

分けてあげるよ」 「お前の弁当食うぐらいなら購買

行く」 「僕のお弁当カブトムシスティック以下！？」

すぐくびつくりしている。

俺

に言わせれば、ここでびつくりするお前がびつくりだ。

「たまには食べてみてよ！きつとキテレッツなのは見た目だけだよ！」  
そう言っただけ  
弁天財（べんてんざい）

い（黒兎は自分の弁当を差し出してくる。しかし…）

「僅かな可能性に賭けて聞くけど、弁当全体を塗り潰すようにかかっているこれは何だ？」  
「キョコレートだけど？」

「どうしてここで『何を当たり前のことを』みたいな顔が出来るんだー！」  
ソースなら！  
せめてソースなら受け

入れられるのに！  
「どうしたの？何か困りごと？」

黒兎のキョコレート弁当がキテレッツ大百科な購買かで悩む俺に、誰かが声をかけてきた。  
校内の『

この声に子守唄を歌ってほしいランキング』（一体誰だこんな馬鹿なランキングつけたやつ）ベスト1に輝いたららしいその声に、俺は戦慄した。

この学校で平穩に過ごすためには、その声の持ち主の前で困った素振りを見せてはいけないのだ。  
「あり

や、緑野（みどりの）くんのお弁当が見当たらないねえ。もしかして忘れちゃった？」  
「…うん、まあ…」

おけーい、ならば私のお弁当を分けてあげましょーう！」

そう言っただけ。

学校1のお節介、春風 薫

は、春の日差しのような笑顔を俺に向けた。  
俺はそれに対

し、抵抗しようという心を追い出すように息をはいて、自分の間抜けを恨むとともに口を開く。  
「…ありが

と。で、今度は何だ？キテレッツ大百科、キョコレート弁当ときて、次は箱ごとシュガーコーティングか？」  
春風の恐

ろしさは、その親切を受け取り拒否させてもらえないところにある。  
だからつまり、春風が弁当を分けると言った以上、それがどんなに突拍子もない弁当でも、俺が受け取るまで彼女は決して引いてくれないのだ。  
しかしどうやら、今回は俺の戦慄は杞

憂に終わりそうだった。

「何の話かわからないけど

…私のお弁当は、とっても普通だよ？」

「自分のこと

を普通だとか言うやつに限って普通じゃないんだよ」

「…緑野くん、初めて話す人が相手でも容赦ないんだねえ」

まあでも、裏表なさそうでいい人っぽいね。

そう言うてから、春風は自分が普通だと思っ根拠を述べた。

「だって、ケチャップとかマヨネーズとかをどびゅーっ！とかけたりしてるわけじゃないし、中身はスーパ〜とかで普通に買えるやつだし！」

「マジマジ」

「…んじゃ、少しもらっていい？」

「まいどあり〜！」

てれれ〜てれ〜。

べんとうばこをてにいれた！

「ってまる〜」

と一箱！？」「？中身はちゃんとあるよ？」

「いや別に『実は空の弁当渡したんじゃね？』みたいに疑ったわけじゃなく！」「こいつ本気で言うてんのか！？」

他人にまるごと一箱の弁当を渡すということは、自分の昼メシが無くなるということだぞ！？」

「ああ〜そのこと？心配してくれてありがと〜。でも大丈夫だよ〜」

そう  
言うて春風は、何ともうひとつ弁当を取り出して見せた。

「こんなこともあるつかと、お弁当はいつも2つ！持ち歩いているのです！」

「…あそう」

脱帽だ。

親切の親切さ加減が非現実的だ。

狂っているときえ

言えるかもしれない。

「ででああ！またね〜緑野くん！」

春風は

そう言うつと、あの春の日差しのような笑顔で戻っていった。

満足したらしい。

友達の輪の中に戻り、昼食を再開

した春風を視界の端に見ながら、俺はぼんやりともらった弁当を眺めた。

春は始まりの季節。

しかし、

始まるのは何も希望だけじゃない。

春の日差しは 危

険な生き物だつて目覚めさせる。

春風 薫

彼女はあの笑顔のしたに何を潜ませているのだろうか。

何を…隠しているのだろう。

「……………」そんな益体のないことを考えながら弁当を開けると、そこには深い緑色の野原が広がっていた。

ていうか昆布しか入ってなかった。主食からお

かずに至るまで全部乾燥昆布（しかも戻してない）で統一されている。「…なあ可愛い我が妹よ」「なんだ

い可愛い我が兄ちゃん！」兄に向かって可愛い

とか言うな。最近流行りの（？）男の娘じゃあ

るまいし。「…弁当、やるよ」「ごめん！あたしも

無理っ！」……………」視界

の端で、春風の友達が苦笑いを浮かべているのが見えた。

天井を仰ぎ見ると、どこからか「御愁傷様」というセリフが聞こえた気がした。



妹持ちに妹萌えはないって話によく聞くけど、妹持ちに妹燃えはないって話

半ば拷問のような昼休みから2時間が経ち、俺とぐみは自宅に続く道を歩いていて。

あの弁当を頑張った俺は情けないぞ

兄ちゃん！あれきしのお弁当に負けるなんて！

…んじゃ今度のお前の弁当は乾燥昆布の詰め合わせな

「お、お代官様！何とぞお目こぼしを！」

「…ならん！俺を怒らせたらどうなるか思い知らせてくれようぞ！」

「あーれー！」

そう言いながらその場でぐるぐると回り始めるぐみ。

俺の名誉のために断っておくが、決して俺が回したわけじゃない。

「けど完食したんだ、負けじゃないだろう」

「そーだけどその後ダウンしたんだから、勝ってもいないのさ！」

「しかしそうは言っても乾燥昆布だぞ？あの文字通り山のような量の乾燥昆布を飲み物無しで食いきった根性は評価してくれよ」

「甘いね！その根性論で同情を誘う手法はクロちゃんのチョコ弁より甘いよ！」

「マジでか」

「マジだよー昆布だって工夫次第でレパートリーが増えるからねー。あそこで調理という選択肢

を選らばなかった兄ちゃんの負けはやはり揺るがないのだよ！」

「でもそれってポリウムも増えないか？」

「というか。」

「昼休みに調理の選択肢を選ぶのもそれはそれでどうだろう。」

「そこであえて本格中華にチャレンジすること

で読者に自己アピールするんだよ！兄ちゃんはただでさえ平凡だからね」

「積極的にアピールしていかないと忘れられちゃうよ！」

「ほっとけや！」

「つーか語り過ぎだ。」

「いつまで引つ張るんだ昆布ネタ。」

「で行こうよ、なかなかないよーこんな機会」

「頻繁にあつたら俺は不登校になるな」

「それは困るね」

え、困っちゃうねえ」

「盗み食い出来なくなるから

か」

「ターゲットがチョコ弁一択になっちゃう

からね」

「ひっばたいた。」

少し加減してひっばたいた。

「滅多にないと

いえばさあ」

「今までのやり取りをなかつ

たことにしたみたいに話題を切り替えるぐみ。

「心なしか顔が

少し赤い。」「…そろそろ、生まれるかも」

「

…ほお」

少し驚いた。

「こいつにこん

な器用な真似ができるとは思わなかった。

意外な切り札を持つてるじゃないか。

「辺りを見回し、

誰もいないことを確認する。

「ふむ。」

「奥

の手を見せてもらったお礼だ。

「構ってやるか。」

「生まれるってまさか…!？」

「…ん」

「頷きながら愛おしそうにお腹に手を当

てるぐみ。 当然そこには誰もいない。

「…新しい家族。今朝からずっと、もしかしたらって思ってたんだ

けど…」

「マジかよ…相手は誰だ!？」

「相手は…実は兄ちゃんなのだー!」

「な、なん

だってー!」

「そんなことより、帰ったらモンハンやるモンハン

!」

「新しい家族が『そんなこと』!？」

もう飽きたらしい。

「仔犬みたいな妹だつ

た。」「で?どれに生まれるんだ?」

「うーん

…具体的にはわからないけど、たぶん兄ちゃんが身につけてるやつ

のどれかだと思つ」

「そうか…。制服とかだったら困る

な」

「着るときは戻ってもらえばいいじゃん!」

「言っでぐみは、にかつと笑ってみせる。」

九十九神。

「器物百年を経て化し

て、精霊を得てより人の心をたぶらかす…の、九十九神だ。」

「今の会話はつまり、俺の持ち物のどれかに九十

九神が生まれるという意味だ。俺の隣で能天気な笑っているぐみ

も九十九神なので（元々は俺が子供の頃大事にしていた本だ）、同族の誕生にいち早く気付いていたようだ。もっ

とも、ぐみにしろ俺の持ち物にしろ、本当に百年ものなわけではない。この世界は20年前、妖怪変化起きやすくなった事件が起きたからこそ短時間で命を得たのだ。「まあ、とりあえず名前だな。家帰ってなんか考えるか」

「言うって、気持ち早めに俺は歩く。」

20年前、怪異の存在が公に認められ、人と妖は手を取りあつて生活するようになった。多くの苦労が

あつたらしい。今でも災害指定が解除され

ていない人を殺す怪異というのはいるし、相手の存在を受け入れられない者もたくさんいる。人側にも怪異の側にも。

俺の通う暁高校は世界初の人魔共学の学校として、人と妖怪の間の差別や溝をなくすための活動をしている。

だからクラスメイトの中には、当然人間じゃないものもいる（ちなみに春風は人間だ）し、ぐみの持ち込みが許されているのだ。

閑話休題。

とにかくそんな世の中だから、怪異

の類いや妖怪変化が現れやすくなっている。

怪異に遭うと怪異に引かれる。

怪異があ

る日常では日常的に、雨が降るように風が吹くように朝に起床し夜に就寝するように 怪異は生まれるのだ。」「……………」

「いやまあ。怪しく異なると書くだけあつて、

発生にはある程度条件が揃わないとならないのだが。

雨や風より台風のほうが近いかもしれない。」「ただい

まー」 うちの両親は共働きなため、家にはいない。

しかしどうやらうちは九十九神が生まれやすい環境らしく、家に帰ると両親の持ち物が出迎えてくれる。「お帰りなさいませ坊っちゃん！ご飯になりますかおやつになりますかそれともお夜食ですか！？」 「メシ以外の選択肢がねえ！」

うちの九十九神は食い気ばっかりだ。」「…お

「や？今朝がた感じた九十九神の気配が強くなっていますな」

「ああ、やっぱりそうなんだ…。」

ぐみ

の観測ミスとかではないらしい。

「いやあめでたい！

男の子でしょうか女の子でしょうか…」

「…い

や九十九神って器物に命が宿ったものだろ？ジークやぐみみたいに人の姿を持つのは異例であり特例なんじゃないのか？」

子供

の頃　それこそぐみが生まれる前は今話しているジークフリー

ト（ シャツの九十九神で、命名したのは母さんだ。ちなみにぐみは父さんの命名 ）を見て育っていたから、九十九神になった物は人の姿になるとばかり思っていたけど。

その『思っていた』が重要なポイントですね。怪異は元々物語や伝承の中にしかない空想の産物です。いると思えばいるしいないと思えばいない。器物に命が宿ると認識すればそうなるし、器物が人になると認識すればそうなります。百鬼夜行の総大将ぬらりひよんも、最初は『人の家に勝手に上がり込む』という設定さえなかったのですよ」

我々は。

ジークは自嘲気味にそう呟くと気持ちを切り替えるようにパンツ！と手を叩いた。

ジークの長い説明に船を漕

いでいたぐみがびつくりしたように背を伸ばす。「では今日の晩御飯は赤飯ですね！新たに生まれる九十九神の登録準備もしないといけませんし、忙しくなりますねえ」

ジークはどこ

となく嬉しそうにそう言うと、台所に姿を消した。

親がいない間は家事の一切をジークが仕切ってくれるので、料理は母さんが作るのよりうまい。

小さい頃、うっかり母さん

の前でそう言ったら泣かせてしまった。　感受性が大豊作な緑野家の母である。

「兄ちゃん！早くモンハン

やるーぜー！」

「あのなあ…先に新しい家族の名前を考えなきゃならないだろうが」

「うん？何で？」

………

何でと来たか。

我が妹は新し

い家族が心底どうでもいいようだ。　「いやさ、そうじゃなくて。

あたしやジークみたく、お父さんかお母さんにつけてもらえばいいじゃん？」 そんなことより遊ぼうよー、とか。

ぐみの中では『新しい家族<俺と遊ぶ』の図式らしい。

悪い気はしないが、いつ戻ってくるかわからない両親に丸投げするわけにもいかない（連絡がつかないことさえある）。  
どうやって説得したものかと頭をひねっている

と、2階に上がる階段の上からぐみが話しかけてきた。「兄ちゃんはお前とその子、どっちが大事なの!？」「お前は俺の何なんだよ」 下校中にもやっただろ。 マツハで飽きたくせにまたやるのか。  
ぐみは元が本であるせいか、よくこういうこ

つこ遊びをせがんでくる。 小さい頃はロリコン役だのシスコン役だのと、俺が意味を知らなかったのをいいことにそういう役をやらされていた（俺の名誉のために断っておくが、そういう性癖があつたわけじゃない）。  
最近では下校

中や今のこれみたいに、おそらくは夫婦や恋人のような役を要求されている。  
まあロリコン役やシスコン役よりマシだが、さすがにこの歳でこつこ遊びは精神的にきつい。

適当に流して話を進めるかと思つた俺だが、ぐみの迫真の演技がそれを思い留まらせる。  
「ひどいよ…あたしはただの遊びだったの!？」 「……………」  
なるほど…

今回はどうやらぐみ演じる伴侶（詳細は不明）に俺の演じる役（ 彼氏役か夫役かはわからない ）が浮気の嫌疑をかけられているシーンか。 しかし…いつの間にか演技のレパートリーが増えたなあ。  
馬鹿だ馬鹿だと思つていただけ

ど、いつまでも馬鹿のままじゃないんだなあ…。 妹の成長は嬉しいやら寂しいやらで、兄としては少し複雑だ。  
よ し、腹アくくつたぜ。 こうしてぐみと遊べるのもいつかできなくなってしまうんだ。  
後悔のないよう、全力で遊んで

やろうじゃないか！ 意を決して階段をのぼる。

ぐみは少し拗ねたような顔をして、上目遣いに俺を睨ん

でいる。 「そんなわけないだろ？俺の一番はいつだつてお前だよ」  
…なんか浮気の常習犯みたい  
しかも若干鼻に

なセリフになつてしまった。  
つく。 もし俺の前でこんなこと言ってるやつがいたら、俺は全力でそいつを殴るぞ。 「……………」  
ぐみも同じように思ったらしく、顔を赤くしてそっぽを向いてしまった。 か

なりお怒りのようだ。 「…そんなの嘘だもん…。兄ちゃんはそもそも、あたしを女の子扱いしてくれないんだし…」  
ボ  
ソボソと何かを呟くぐみ。 ……そうか。

呪いの呪文を口にするほど腹がたつたか。 ごっこ遊び  
とはいえ、自分の亭主があんなセリフを言うのはそんなに許せなかつたか…。  
仕方ない。  
ぐみの機嫌

取りもかねて、少し路線を変えてみるとしよう。  
今度は不器用な口下手キャラっぽく、言葉ではなく行動で示す方向でいつてみた。  
「……………」

具体的には、ぐみに抱きついた。  
「……………」  
腕の中でぐみの体が緊張に支配されたのが伝わってくる。  
やっぱりいきなり抱きつくのはびつ

くりするか。 とりあえず落ち着かせるために頭を撫でてみよう。 「……………」  
今度は全身から力が抜け、腕の中から落ちそうになる。  
「……………」  
どんだけ落ち着いた

んだよ…。  
子供の頃は、こうするとどんなにぐずつても泣き止んでいたから、もしかしたら機嫌を直してくれるかもと思ったのだが…予想以上の効果だった。  
力が抜

けてうまく立てないのだろう、ぐみは俺の背中に腕をまわして抱きついてきて、弱々しく口を開く。  
「…大好  
きだよ、兄ちゃん」  
……………」

弱々し過ぎて聞こえなかった。

まあ今回のごっこ遊びは『浮気亭主とその妻』  
みたいなお題だったはずだから、たぶん「もう浮気しちゃだめだよ」

的なことを言ったのだろう。

ならば俺の返答は、こ

れが正解なはずだ。

「…ああ、分かっているよ」「…んっ、

なら良し！」　そう言っただけで離れるぐみはまだ機嫌が直りきつてないのか、いくらか顔が赤くなっている。

しかし表

情は願いが届いたみたいだな笑顔であるところを見ると、一応は及第点だったようだ。

「じゃあ（ごっこ遊びも終わったし

）新しい家族の名前を考えるか」

「うん？あたしも一

緒？」　「当たり前だろ、家族なんだから」

「あた

しはいいよー面倒くさいし。それよりPSP貸してー！」

「貸すかつ！人の尻ポケットをまさぐるな！」

さす

が我が妹。

俺がどこに何をしまっているかを完璧に把握

している！

「あたしもだてに兄ちゃんの妹や

つてないよー！兄ちゃんのことほククの数さえ知ってるよ！」

「……………」　それはそれで怖いんだが。

しかしそれを言うなら妹よ、俺だつてだてにお前の兄ちゃんやってないぜ！　ホククの数はさすがに知らねー

けどな。

「手伝ってくれたらゼリーやるから」

「……………」

あれ？

おか

しいな、いつもならコンマゼロで飛びつく（文字通り俺に飛びついてくる）のに、今日はリアクションが薄い。調子が悪いのか

？　「だつて…新しく生まれる子が女の子だったら、倍率が上がっちゃうし…」

「倍率？何の話だ？」　狙ってる学校が

女子大とかなんだろうか。それでも1人くらいじゃ大し

て変わらないと思うし、何より名付けを拒む理由にならない。

「だつて、持ち主に名前をもらえるなんてずるいよ…。あたしはお父さんだったのに不公平だよ…」

「ぐみ、何を言っ

ているのかよく聞こえん。気に入らないことがあるならばつきり言

え」　「兄ちゃんが名前をつけるのが気に入らない

！」　「…ええー。」

何それ、俺のネーミングセン

ス全否定？

そうか…俺の考える名前はダサイのか…。

「兄ちゃん…何でそんなに落ち込むの…？そんなに名前を付けたがるってことは、やっぱりあたしより新しい子のほうが大切なの…？」 また泣きそうな顔になるぐみ。

…泣くほど俺のネーミングセンスはひどいのか。 それじゃあ仕方ないな。「名前はぐみに任せるよ」「…あたし？」

目に涙を貯めながら不思議そうな顔をするぐみ。 少し子供の頃を思い出す。 「俺が名前をつけるのが嫌な

んだろ？だから、ぐみに任せる。 いい名前を付けてやってくれ」

「その手があつたか！」「…どの手が？」

というか何に對してだ？「ふふふ…そくだよそくだよそうなんだよ！あたしが兄ちゃんより先に名前を付けちゃえば新しい子はあたしと同じく兄ちゃんからは名前がもらえないんだよ！いい名前？まっかせてちょーだい、兄ちゃんはPSPとかやって待っててねー！」

…早口過ぎて聞こえなかつたが、何やら不思議な理由でぐみのテンションが上がった気がする。

名前がどうか言ってたような…あいつも姉として、新しい兄弟に名前をあげたかったのか？なら何で最初は嫌がってたんだらう…。

よくわからん。 しかしここで

本当にPSPとかやつたら、妹に仕事を押し付けて遊ぶ兄みたくで精神衛生上よろしくない。 1階に行つて、

ジークの手伝いでもしようかと考えたその瞬間だった。

俺はホタルにジョブチェンジした！

正確に言うつと尻が光った。 「ち

よっ……何だコレエエエ！？」 「どうした兄ち

や…っ！？兄ちゃんがホタルにジョブチェンジしたあああ…！」

だよねやつぱそくだよねこれ！ 「いや待て

慌てるな一旦落ち着こう！！まずは原因の究明だぐみ二等兵！」

「りやりゆりよ了解しました兄ちゃん隊長！」 ポン

コツと化した兄妹の調査の結果、『尻が光っている』という情報は、正確だつたけれど正しくはなかつた。



これ…PSP…？」

ぐみが俺の尻ポケットから取り出したP

SPを眺めて呟く。

PSPからは光とともに数

字の1と0が溢れ出ている。

この様子は

ぐみが生まれたときによく似ている。

そう思うのと同時に視界を覆い尽くすほどの光が溢れ出る。

やがてそれが少しずつ収まると、薄れゆく光の中に人影が見えてきた。身長はぐみと同じくらいの少女。

溢れ出る光と1や0とともに宙を踊る髪は、澄んだ昼間の空のような青。ゆっくりと開かれた瞳はそれとは対照的

に、夜が明ける頃の海のように深い青色を称えている。

光が完全に収まると、生まれたての九十九神は感情の見えない人形みたいな顔を俺に向け、抑揚のない…それでも生まれた喜びを感じさせる声で、俺に語りかけてきた。「初めましてマスター。私に名前をください」

別に見ていたんじゃない。たまたま視線がそこに向いたただけだ

「…どうしたの緑野くん？何だかお疲れみたいだけど…」

「ああ…春風か…」 疲れた人も親切のターゲ

ットなんだな、とか言いながら、机に伏していた顔を持ち上げる。

春風は「そのセリフだと私が殺し屋みたいだねえ」

と苦笑いしたあと、自分の主張を声に出す。 「だって昨日

と比べて、明らかに元気がないんだもの。何かあったのかなーって、

心配になるでしょう？普通」 「…どうだろう

な」 たったそれだけのことで、俺はほとんど関わりのない

誰かに声はかけない。 大阪の人ならやりそうなイメージあるけ

ど。人情の街っていうし。 でも、春風のそれは少し違

う気がする。何ていうか、親切であることを自分に強いてるみたい

な。 「それで、何かあったの？」 「

…」 「話を戻された。 何かあったこ

とを白状するまで、彼女は納得してくれないらしい。

まあ、隠すようなことでもないしな。 「昨日、九十九

神が生まれたんだよ」 「わあ、そうだったんだー。

おめでとー」 言って、にぱつと無邪気に笑う春風。

その春の日差しのように暖かな笑顔は、新たな命の誕

生を自分のことのように喜んでいる。 「いいな、九十

九神。私もねえ、お気に入りのお人形さんが喋ってくれたらいいな

ーって、いつつも思うもん。やっぱりその子も、ぐみちゃんみたい

に女の子なの？」 「まあそうだけど…」

なぜ女の子一択なんだ。 男の子の可能性は全否定か。

「いやあ、私もそんなに詳しくないからね。九十九神が

人の姿をとる場合は女の子なのかなーって、勘違いしてただけ」

要するにさっきのセリフは「新しい九十九神も人型な

の？」という意味だったらしい。 それならそう

と言ってくればいいのに。『人型』のほつが一文字お得だぜ？

勘違いというより見当違いだ。

「うん？でも、

どうしてそれで、緑野くんが疲れるの？」

「

……いやあ」

もうその話はよくないか？

引つ張り過ぎだろ…行数稼ぎと思われるぞ？

「

行数も路銀も稼がないよ。私はただ、それが私に背負える荷なら分けてほしいだけ」

1人で背負うより2人で背

負ったほうが、楽だから。

春風はそう言

った。「…ぐみと新しい九十九神が、名前で揉めたんだ」

名前で揉めたって？」「名付け親が誰になるかでひと悶着あつた

っただけ」

「初めましてマスター！。私に名前をください」  
彼女が生まれて最初に要求したのは、自分の名前だった。

とはいえ、過去にも同じように要求された経験を持つ俺は特に慌てることなく、その要求に応えようと努力する。

「そうだな…お前の名前は…」

「あたしが考えるっ！」 元氣よく右手を挙げるぐみ。

彼女は表情を変えず、しかし不満そうに抗議する。「…私はマスターにお願いしました。姉さんは休んでください」

「おうおうおう、あたしの名前が受け取れねえっ

てのかい！？」

酔っぱらいかお前は…。「はい、

受け取れません」 容赦ねえ！！

「…にいちやーん…」

お前も妹に泣かされんなよ！！いや気持ちは分かるけどさあ、もーちよい頑張れないか！？

「…姉さんも九十九

神なら分かるでしょう。持ち主から名前をもらうということが、私達九十九神にとってどれほど幸せなことか」 妹の幸せを、姉さんは邪魔するのですか。

感情のこもらない声で、彼女は

そう言った。

ていうか幸せって。

そこまで言うか。

「そこまで言うよ！あたしたちはねえ、持ち主に名前を呼んでもらいたいから生まれてくるんだよ！！その名前が他の誰かにつ

けられるあの絶望を、兄ちゃんは知らないんだよ!!」

…そうなのか?」 「まあ、おおむねそんな感じですよ。」

マジかよ。 そうだったのか…あの時は

ネーミングセンスに自信がないからって父さんに任せただけど、かえって悪いことしたかな。 「あたしはにーちゃんからも

らえなかったのに、名も無き妹はにーちゃんに名付けてもらえるなんて不公平だよ…! そんなこと、ゼツタイさせないもん!」

いいでしょう…マスターから名前を頂けためなら、姉の屍も乗り越えてみせます」 「乗り越えんな!」

名前がただけ大事か知らねーけど、家族の屍越えてまでもらうほどの名前なんざ用意できねーぞ! 「食らえ哀しみの必殺、ぐみ

チョップー!」 「痛っ」 降り下ろされ

たぐみの手刀を避けきれず、肩に直撃を食らい、わずかながら顔を歪める新しい妹。 …マジでやりやがった。 いやまあ、ま

だじゃれあいのレベルだけど、兄妹喧嘩って(他の家はどうか知らないが)こういうことから発展して始まるしな…。

「…この威力、ただの手刀ではありませんね」

「ふっふーん、ごめーさつ! あたしは絵本の九十九神だからね、普通のチョップよりちよつと痛いチョップが放てるのだ! 名付けて、

えーと…《本の背表紙は地味に痛い》!」 ルビはブツ

クカバーだよ!とか、まな板みたいな胸を張って得意げに痛々「にーちゃん今すぐく失礼なこと考えてなかった!」 「地の文に割り

込むな!」 何でわかつたんだ。 ていうかいくらシヨボくても妹とのじゃれあいで九十九神の能力を使うなよ…。

そういうことから喧嘩に高度成長するんだろうが。 「困りました…。私の能力は戦闘向きじゃな

いし、そもそも怪異が相手では力を発揮できない…」 表

情はやはりほとんど変わらないが、全身から悔しさを滲ませる新しい妹。 …っーかさっさと名前付けてーんだけど。 毎

回『新しい妹』とか呼ぶの、いい加減面倒になってきた。

「加えて生まれたての体じゃ、素早い動きもそれに対応することもできないもんねえ。あたしも経験があるからよく分かるさあ」 ……んなもん生まれたてのバンビにバタフライナイフ持つて挑むようなもんじゃねえか。      よくそんなどや顔ができるな。

「…しかし、私は諦めません。必ず姉さんを倒し、マスターから名前をもらうんです」

「ふっ、よくぞ言ったわ！それでこそあたしの妹よ！」

お前それ言いたかっただけだろ。

しかしそろそろ止めないと、マジでマジ喧嘩に発展途上だな。なんかこいつら無駄にノリノリだし。      しかし、結果として俺の仲裁は必要なかった。

俺より先に2人を止める声があったからだ。      「いきますよ、姉さん」      「くるがいい！あたしの《本の背表紙は地味に痛い》の餌食にしてくれるわー！」

「お前らいい加減に…」      「『伶俐』」

声の主はジークだった。      謎の呪文を口にしたジークは、少し呆れたような顔をしながら階段を登ってくる。

ていうか『伶俐』って何？      「『頭

がよ、りこつなこと） 岩波国語辞典（）』という意味の単語ですが、今回は彼女の名前です」      言いながらジークは、生まれたばかりの九十九神を指し示す。      瞬間      伶俐

伶俐と名付けられた少女は、無表情をほんの少し驚愕に染めた。

あるいは、伶俐を包む空気が全部絶望に沈んだと言ったほうが正確か？      まあ何にせよ、その場が（ジーク以外）凍った。

「全く騒がしいと思って来てみれば、何をしていますか。生まれたなら早く報告してもらわないと、書類が作成できないじゃないですか。ピュアブラックと生活するにはきちんと手続きをしないと違法行為で捕まるんですからね、遊んでないで迅速に…」

途中からは説教ではなく独り言だったのだから、ぶつぶつ言いながら階段を降りて行くジーク。      なかなか堂に入った母親ぶりである。      さすがは母さんより長く母親をや



合わされた。

難だったねえ」

「それは何というか…災  
苦笑いで同意してくれる春風。」

1人で背負うより2人…か。確かに春風の同意のおかげでだいぶ楽になった。そうか…あいつらはこの感じが欲しかったんだな。これ以上この話を続けると、今度は俺の愚痴が止まらなそうなので、話題を変えることにする。 「しかしす

ごいよな春風。普通、他人の愚痴なんか聞きたくもねえだろうに」

「そんなことないよ」。私は、普通。私だって、見返りがほしいから愚痴を聞いているんだよ？」 「見返りつて…。んじや

俺は何を要求されるんだ？」 聞いたら、春風はずいっと顔を近づけてきた。 どのくらい近くかというと、ちょうどおでこがく

つつくくらいの距離。

この女子に人付き合いの距離感は無

いのだろうか。 心臓がお祭り騒ぎだ。 「緑野くんは、私が愚痴

を聞いて、どうなった？」 「…楽に なった」 荷を2人

で 分けたから。

「おけーい！ だったら私

の望みは叶いました！」 元の位置に戻り、笑顔を咲かせる春

風。 少し残念に思った自分はスルーする。

「俺が楽になることが、望み？」

「最初に言

ったでしょう？ 私に背負える荷なら、分けてほしいって」

私はねえ、友達の幸せが好物なのですよ！ と言って、胸を張る春風。 一つの間にか友達になつてた…。

しかしぐみみは妹だし胸はまな板だから何とも思わなかったが（机の上の絵本が抗議してきた。ちなみにぐみみは、春風が声をかけてきたあたりから元の姿に戻っている）、さっきあんなに顔を近づけた女子がたおやかな胸を張っていると、何というか…うん。

巨乳というわけではないが貧乳というわけでもない、美乳とでも呼ぶべき「何か私の胸にいやらしい視線を感じるんだけど…」 「おやおや、この教室にはずいぶんとぶしっけなやつがいるんだなあ」「いや俺だけど。 女子が視線に敏感っ

て本当だったんだ…春風さんと我が妹のジト目が痛い…（ぐみは絵本に戻ってるからどんな目をしてるか分からないけど、何か刺々しいオーラを放っている）。しばらく2人のジト目に冷や汗をかいていると、仕切り直すように春風がため息をつく。

「まあ、緑野くんもお年頃だもんねえ。女の子に興味を持つてて当たり前か…」  
「え、見ていいの？」

「言つてません」 またジト目。 「その話は流して、えーと伶俐ちゃん？はどこにいるの？」

流された…。 『置いといて』とかだったら

食い下がれたのに…。 「…緑野くんがやたら悔しそうにしてるんだけど…。男子の友達はいないから知らなかったけど、男の子ってこんなにも女の子の胸が見たいものなの…？」 ……うん、冷静になつてみると我ながらドン引きだ。

第二の阿良々木暦でも目指すつもりだろうか。 「…アララギつて、誰？」 化物語ネタが通じなかった。 いや、通じたら通じたで、今度は妹へのセクハラを勘

ぐられたかもしれないけれど。 「…あれ、何の話だったっけ？」 「いやだからさ、伶俐ちゃんは

今日来てないの？つて」 お願いだから話を聞いてよ…と、疲れたようにぼやく春風。 悪

ノリが過ぎたか。 「てか来るわけないだろ、生まれたてなんだから」 「……………？何で生まれたてだと来ないの？人間の赤ちゃんみ

たいに、まだ歩けなかったり喋れなかったりするわけじゃないでしょう？」 「…学校の授業で何を聞いてたんだ？」

「…こんなん基本中の基本だぞ。」 「…実は、勉強つてあんまり得意じゃないんだよ」 恥ず

かしそうに笑いながら、消え入るように呟く春風。 まあ俺の場合、九十九神と日常生活送ってるから、妖怪学

は体感で学んでるようなもんだからな。 妖学は俺の数少ない得意科目だ。

「…えーと、じゃあ、怪異の種類は2つに分けられるのは知ってるよな？」 首を横に振る春風



さん。…いやさすがにそれはヤバくないか？ 「怪異

は大きく分けて2種類いる。純血のピュアブラックと、混血のトワイライトだ」

まあ、怪異に血統なんてほとんどないけど。 分かりやすさ優先だ。 「で、中でもピュア

ブラックは、人間と暮らすには何かと障害が多いんだ。人を襲う怪異ならまずその設定をどうにかしないとならないし、心への耐性をつけないとならない」

ここで区切り春風の反応を見て  
みたら、目が泳ぎはじめていた。 …まさかもう限界なのか？ 「こ…心への耐性ってなに？」

「怪異が有する様々な能力と同じで、心つてのは人間の持つ『互いを紡ぎ、事象を超越する能力』…簡単に言えば、誰かと仲良くなれて、奇跡を起こすチカラなんだ」

そしてこの力は、怪異にとつて毒と変わらない。 「耐性無しで人間の中に放り込めば、心は怪異の存在を喰ってしまう」

「喰うつて…。心つてそんな乱暴なものなの？」 「いや、だから言っただろ？ 本来は『繋がる力』なんだよ」

怪異には、それが出来ないというだけで。 繋がる

ための心が、無いというだけで。 「一方的な繋がりは、相手の存在を喰ってしまうんだ。例えば虐待を受けた子どもは、それを虐待だと認識しないことがあったり、虐待した親と似たような人を好きになったりするだろ？ それは存在が喰われて、自由度が下がるからなんだ」 人間なら、それでも命があるから それが果たして幸せなことかは別にして 存在し続けられるけれど、

怪異はそうはいかない。 人間の心から、身を

守らなければならぬ。 「じゃあつまり伶俐ちゃんは、心耐性をつけるための修行に行ってるの？」 「修行ってほど大層な

もんじゃないけど…九十九神は例外的に心耐性がある怪異だから、事故防止の講習がメインだな」 ちなみにこの講習も

役所への申請同様、法律で義務づけられている。 車の免許を取るのと同じだ。 最近では交通事

故より発生率の高い事故 妖怪変化。

闇

にあてられた人間が怪異化する現象だ。  
いて、精神的に弱い人ほど遭いやすい。

特に心が弱って

人

と怪異の共生に伴うマイナスとして、反体制派の演説に頻出する単語だ。「そっか」。妖怪と一緒に暮らすって、大変なんだね」

勉強になったよ、と言って、手を降りながら席に戻る春風。 話に飽きたのかと思ったら、

いつの間にか来ていた先生が号令をかけていた。 あわてて起立する俺をよそに、ぐみは絵本のまま沈黙していた。

祭りは始まる前が楽しいと言いますが、ゲームも起動するまでが楽しいのかもー

なんだか寄り道ばかりしている感があるが、どうでもいいことに時間を使い過ぎている感是否めないが、もう少し我慢してほしい。

大丈夫、ゆっくりではあるが、確かに物語は始まりつつある。

もっともこの話の始まりをどこと定義するかは、意見の分かれるところだと思う。 事の中で

ある（彼女からすれば勝手に中心に据えられたという感じだろうが）春風 薫が体験した何かを始まりとするなら、遅すぎる開幕だ。 どんだけ予告ダイジェストを流していたんだという話である。

俺が春風に声をかけられたときや怜悧が生まれた瞬間が始まりだとしても前振りが長すぎるだろう。 では今この瞬間を。

春風の下駄箱から溢れ出た大量の手紙（俺みたいなもんから見たら、5通は大量の部類だ）を発見したこの瞬間を始まりとしてならどうだろう。 「……………」

真、リアクションに困った。 ていうか何だこ

れ。 春風に人気があることは知っていたけど、5通って。

どう見ても18歳以下にしか見えない青少年ぐらいはいるだろうけど（決してロリコンなわけではない、テレビと教室で実際に見たことがあるだけだ）、一周回ってもはやギャグみたいにモテるやつまで実在するとは…。

そもそもなぜ俺がこんな場面に立ち合っているかといえば、それはついさっきの出来事に起因する。 どういうわけだが、春

風が「一緒に帰ろー！」とか言い出したのだ。 そしてさらにどういうわけか、これにくみが猛反発した。

「だーめー！！にーちゃんはあたしと一緒に帰るのー！」

「3人で一緒に帰るっていう選択肢もあると思うんだけど…それもだめなの？」「だめだめだめー！！にーちゃんも何か言っつてよ！」 「別に俺は構わないけど…何がそんなに嫌なん

だ？」

そんな一幕を経て、ぐみは絵本

バージョンで俺の制服の中に潜りこんでしまった。

仕方がないから、そのまま春風と下駄箱に向かって今に至るといっわけだ。しかしそこはギャグみたいにモテる女、春風

薫さんである。

俺がリアクションに困っている

間にも、慣れた動作で手紙（ ていうかぶつちやけラブレターだろう ）を取り出し、慣れた運動でゴミ箱に向かい、慣れた動きで…  
つて！ 「ちよつと待てエエエ！！」 流れるよう

な動作でラブレターを捨てやがった！ 誰にでも優しいキャラはどこ行つた！ 「うん？どうかしたの緑野くん」

さっきまでと変わらない調子で、そう返す春風。

「どうつて…今の、は…」 「あはは。心配してくれるの？優しいね、ありがとー。でも大丈夫だよ」 …いや。 前言撤

回だ。

春風の様子がおかしい。 どこを見ているのか

わからない。俺ではない誰かを見るような、今  
ではない昔を見るような。 「これは罰で、わたし  
が背負うべき罪なんだよ。だからへいき。」 今度こ

そ、わたしがたすけるからね。 輝きを失った焦点の  
合わない目に俺ではない誰かをうつした春風は、それだけ言って帰

ってしまった。 まさかあれはいじめの一環なのかと思い、捨て  
られた手紙を開封してみてすぐ後悔した。 「…なん

か電波全開だったねあの人」 「そーいうことはせめ  
て本人の前で言え」 「言うのはいいんだ…」 捨てら

れた手紙の執筆者に、勝手に読んだことを心の中で謝りつつ、いつ  
の間にか人間フォームになっていたぐみに発言の訂正を促す。

この瞬間を物語の始まりだとするなら、それは  
あまりにも唐突な始まりだった。

「へえー。この子が淋漓の言つた新しい妹さん？」 「緑野

伶俐と申します。以後お見知りおきを」 春風がラブレターを

「へえー。この子が淋漓の言つた新しい妹さん？」 「緑野

ダストシュートした日の3日後、教室では研修を終えた伶俐が黒兎と挨拶をしていた。伶俐は相変わらず感情の読めない無表情で、黒兎も相変わらず小学生にしか見えなかった。

「いつも小学生扱いはともかく、相変わらずって単語が出るほど離れてないでしょ」

「そうんだけど、なんか久しぶりな感じがするんだよな」

「まあ2話しか間は空

いてないのだけれど、いつそ懐かしくさえ思う。」

「おはよ

ー黒兎くん緑野くん！あつ、この子が伶俐ちゃん？初めまして、春風です！」

黒兎と談笑していると、いつもの

春風が会話に参戦してきた。

しかし3日前の春風

を見て以来、俺にはその普段通りな様子さえ異常に見えてくる。

「…初めまして、伶俐です。失礼ですが、マスターとはどういったご関係ですか？」

「本当に

失礼だな！」

うちの妹陣は悪くも悪しくも遠慮が無さすぎる。

ただ、その遠慮の無さのおかげで春風が質問攻めにあっている。この隙に黒兎に、春風の裏の顔：3日前の言動について聞いてみる。家業柄そうなのか、黒兎は学校の噂にやたら詳しいのだ。

「ああ、その話なら結構有名だよ。少なくとも、告白のために軽く下調べするだけで耳に入るくらいには」

「…じゃああのラブレターはなんだったんだ？」

嫌いだとわかった上で

送るなんて、やっぱりいじめ…？」

「いやほら、

世の中には少し普通じゃない趣味を持つてる人がいるから。そういう人たちが、春風さんが自分の書いた手紙を捨てるのを見て喜ぶための手紙だったんだと思うよ」

「やっ

ぱりいじめじゃないだろうか。」

「だからたぶん、そ

のあと勝手に手紙を見た淋漓も支持率が上がってると思うよ」

「やっぱりいじめじ

ゃねーか。」

「いきなりそんなこと聞いてどう

したの？まさかとは思っけど、淋漓も告白するつもりなの？」

「そこ

から先は続けられなかった。

九十九神シスター

ズに飛び掛かれたからである。「にーちゃん！今のはどーいうこと！？ちよつと聞き捨てならないよ！」

「彼女の優れた点と私たち姉妹の劣っている点を具体的に教えてください。1週間もあればマスターにご満足して頂ける仕上がりになってみせますから」

「何でもかんでも恋愛に結びつけるな！俺はそういう安易な発想が大嫌いだ！」 結局、飛び掛かってきた愚妹どもを引き剥がす作業のせいで黒兎との会話は打ち止めになった。

妹x

2を引き剥がすのに今までの倍以上時間を消費したことを除けば、実にいつも通りな朝だった。

「しかしマスター。」

真面目な話、彼女は止めておいたほうがいいです」「うん、あたしも伶俐とおんなじ考えだよ」

「真面目であれ不真面目であれ、その話はもう終わつただろうが。今さら蒸し返すな」

昼休み。

伶俐が加わったこと

によりぐみの盗み食いは阻止され、久々に落ち着いた食事ができる（ぐみが生まれて以来だ）と思って迎えた昼休みは、伶俐のそんな一言から始まった。

「まあそう言わずに聞いてください。」

「彼女が人間ですが、どういふわけか微かに妖気を感じるのです」

伶俐

「妖気変化の前兆じゃないか！」  
伶俐のセリフに、弾かれたように黒兎が反応する。黒兎は陰陽師の家系で、その仕事は妖怪変化を代表とする怪異関連の事故の対処だ（他にも怪異が起こした事件を解決する仕事があるが、同じ陰陽師でも事件と事故では、いわば部署が違うらしい）。

「しっかしいくら伶俐が怪異だからって、素人に先越されんのはプロとしてどうなんだよ」

「う…：そうなんだけど…。」

「それより、早く対処してこないと！」

「ち…：逃げたか」

「まあ、確かに早く対処しないとまずいのだが。」

妖怪変化って深みにはまると、滅するしか（説明するまでもないと思うが、殺すということだ）なくなるらしいし。

黒兎の対処を待つこと3分、一仕事終えたみたいな顔をして、黒兎が戻ってきた。「よーおかえり。どうだった？」

「何事もなく終わったよ。春風さんも協力的だったし」  
達成感に満ちた黒

兎の報告に怜悧が首を傾げる。「その口ぶりだと、対処に非協力的な人がいるみたいに聞こえます」  
「うん、たまにあるんだよ。自分が怪異になりかかっているっていうことが受け入れられなくて、結果的に怪異化が加速しちゃうパターンが」

「そうなのですか？」  
「ジジツから目を反らしたダイシヨーってことだね！」  
「構ってほしかったのだろうか。ぐみもつともらしい横やりを入れる。」

「まあ厳しい言い方をするとそうなるのかな。他にも、対処後に悪化するパターンとかもあるんだよ」  
「え、マジで？」

それは知らなかった…というより、それは対処が甘かったってことじゃないのか？  
「いや、このパターンは対処の出来に関係なく、対処をしたことが悪化の原因になるんだよ」

「えー？対処って、大丈夫な状態にすることじゃないの？」  
「そうなんだけど、手

術は大がかりなほど当人への負担が大きいのだよ。妖怪変化っていうのは、人間が暗い感情を溜め込んだときに、その感情を苗床に怪異化することを言うんだけど、これに対処を施すと、抱えた感情が大きいほど心に負担がかかるんだ」  
「だいぶややこしい話になってきたせいか、ぐみはすでに舟を漕いでいる。」  
怜悧は

それとは対照的に早く続きをと黒兎を急かす。「兄弟は年下のほうがしつかりした子になりやすいと聞くけど、ここまで顕著なものなのか？」  
「いくら対処を施しても、一度芽生えた感情は無かったことにはできない。ちょっとしたきっかけで再燃し、対処を施されて弱った心を一飲みにしてしまう」  
結局は、ぐみちゃん  
の言った通りなのかもね  
と。  
黒兎は

怪談を締めくくるように、妖しく笑ってそう言った。

その日の昼休みの話題は、黒兎の妖怪豆知識に終始した。

まあ、ここから先は賢明な読者の皆さまの予想通りだ。もうバれていると思

うので先に言ってしまうが、あの後春風は闇に飲まれ、俺たちは春風が助かるために頑張った。オチの分かりきった

物語を読むのは退屈だろうが、先に述べた通りこの話は喜劇だ。

意気込んで風車に挑む空回りな道化を笑ってくれれば重畳だ。では、物語を再開しよう。

黒兎と妖怪雑字を語り合い、家に帰ってから初めて兄妹3人で買い物に行ったあの日から。「…あのなくみ、お前子どもの頃ならまだしもこの歳になってまで兄の腕にぶら下がるな。重いし歩きにくい」

「え？だめなのですか？」

「ちよつと待て伶俐、何でお前まで空

いてるほうの腕を猛禽類のような目で狙っているんだ」

日もすっかり落ち、太陽に変わって街灯が道を照らす時間。なぜこんな時間に妹を両腕にぶら下げるといっ

風変わったスポ根な場面が出来上がっているのかといえば、ジークが倒れたからだ。ジークはTシャツの九

十九神で、その能力《過剰な重ね着》（『ルビはアンダーウェアだ』と母さんが得意げに言っていた。ぐみがああなったのは確実に母さんのせいだ）は、着用者として登録した人のダメージを肩代わりするというものだが、家に帰ったらそのジークが文字通りボロ雑巾と化していた。俺たちはそんな酷い怪我を負う

機会はなかったので父さんか母さんか、あるいは両親のダメージを肩代わりした結果なのだろう（あまりのダメージ量に、ジークが人の姿を保てなくなっていた。：俺が車に轢かれたときでもこれほどではなかった）。大慌てで陰陽師に一報を入れた（存在が危うくなつた怪異をつなぎ止めるのも彼らの仕事だ）俺たちは、そんな理由から自力で食料を調達しなくてはならなくなったのだ。



とはいえこのパーティーには料理ができる奴がいなかったので、予算の都合からコンビニ弁当を買うことになったというわけだ。

「…しかしジークさん、あんなときでも家の心配をするんですね」

「運ばれる直前まで、洗剤の分量とかご飯代のある場所とかをにーちゃんに教えてたもんねえ…」

「本当にどこまでお母さんなんだよ…」

そんなことを道々話しながら歩いていたら、突然何かが降ってきた。

「うわあっ！？」

地面はコンクリートで舗装されていたし、それは地面を砕くほどの勢いで降ってきたというわけでもない。

視界は良好だし、街灯だつてついている。だから、それが何なのかを俺は視認できていた。

「しかし。それが何なのかを理解する前に、それは俺に狙いを定めて襲いかかる。」

「ッ！！」

俺が無傷で絶句で

きたのは秘めた力が解放されて超人的な回避をしたからとかではなく、ぐみが俺に飛び付いて横っ飛びしてくれたからだ。

「情けねー兄貴である。」

「何こいつ…災害型怪異！？」

「姉さん、落ち着いてよく見てください。でないとは私は姉さんをダメな子呼ばわりしなくてはならなくなります」

「…なんか妹からの風あたりが厳しい気がするよ…」

「この不安定な妖気、闇を纏つた人のような姿…妖怪変化の症状と酷似しています。つまり…」

「あー、なるほど！この人春風さんか！」

「やっぱり。俺は最初にそう思ってしまった。」

「こいつの目は（レイニーデビルのような目と言ったら通じるだろうか）、下駄箱のところで見た春風の目によく似ていた。」

「何でその結論に達したのか興味の尽きないところですが、つまりこれは元人間であり、そして…」

「何でつてそりゃ、あれだけ露骨に伏線張ってたら誰でもわかるよ」

「お前そんな根拠どころか違和感とさえ言えないようなことであ

つの正体を断定したのか!？」

俺の同意を返せ。

それとも妹のスペックの低さを考慮しなかった俺が悪いのだろうか……。余談だが、この楽しいおしゃべりには妖怪変化も暴力棒で参加している。堕ちたばかりなせいで体が馴染んでないのだろう、実はそんなに速くない。これぐらいなら、真人間の没個性な俺でも避けられる。　「そんなバ

力な根拠で人の話を腰を折らないくださいダメ姉さん」

「ダメ姉さん!? 伶俐今あたしのことダメ姉さんって言った!？」

「そんなことはどうでもいいんです。重要なのは、マスターが協力してくだされば、この…人を人間に戻すことができるということですよ。………」

は? 「俺が!？」

何だそのラノベ展開!」

「事实は小説より奇なり、ということですよ」

「この場にいる人間がマスターだからです」　この妖怪変化を助けるにあたって、心の能力が必要なのです　と。　伶俐は、その理由を話しはじめた。

「ざっくり説明しますと、私の能力でマスターをあの…人でいいですよ、あの人の心の中に送り込むことができます。そうしたらあとは、妖怪変化の原因を直に処理

することが可能です」　「マジでか!？」

対妖怪変化を生業とする黒兎から見たら反則みたいな能力だ。　と、そのとき。　「う…う…う…」

「お!? 喋った! 春風さんが喋ったぞにーちゃん!」　「だからダメ姉さん、漫画脳な根拠であの人を春風さんと断定しないでください」　「ああああああああアアア!」

「ついけません…闇が馴染んできています。このままでは陰陽師に通報して滅してもらうしかなくなります! マスター!」

「おう、任せろ!」　こいつが春風であれ見知らぬ誰かであれ、助けられるやつを見捨てるつもりはない。心の中でもどこでも

行つてやる！ 「ではまず、マスターはラインを繋いで  
ください！」 「……………へ？」 ラインつて何？

「心には互いを紡ぐ能力があるでしょう？あれであの人の心を繋いで  
ください！」 「いやいやいや無茶を言う

なアアア！！心にそういう能力があるとは言つても使い方がわかん  
ねーんだよ！！」 閃きつて自分の意思で起こせる現象じゃねーだ  
ろ？それと同じだよ！ 「だって自分の心でしょー！？にー  
ちゃん何で使えないのさー！」 「うわっ！？さつき  
より速ええ！」 右、左。 襲

つてくる妖怪変化の攻撃を避ける。 ラインどころか

会話さえ難しくなってきた。 「《本の背表紙つて地味に痛い

《！！」 妖怪変化と俺の間に入り、技名を叫んで一  
閃する。 かししよせん本の背表紙で殴つた程度のダメージしか  
ないので、相手は全く怯まない。 妖怪変化がぐみ

とバトルパートに入り、ここぞとばかりに声をあげる伶俐。 「今  
ですマスター！ラインを繋いでください！」 「だから無理だつ

て！繋ぎかたがわかんねーんだよ！！人間は訓練しなきゃ何もでき  
ねーんだ！！生まれた直後に二足歩行して白米を食す赤ん坊がいる  
か！？」 俺は寡聞にして聞いたことねーぞそんな気色悪い

赤ん坊！ 「けど、春風さんは友達でしょう？一

度ラインを繋いだことがある相手なら、もう一度同じことをすれば

…………… 「あいつが春風かどうかなんてわから  
ないだろうが！」 ぐみのギャグのせい

なあなあになつてたけど、あいつが春風だと決定付けるものは何も  
ないからな！？ 「大体友達つーのも春風が勝手に言ってるだけ  
…………… ちよつと待て……………一度繋いだことが

ある？ 要するにラインつてのは、相手との繋がり

となのか？ そういうことなら……………そしてあいつ

が春風なら。 ど素人の俺にも、ラインを繋げる方法があるか  
もしれない！ 「……………失敗しても、がっかりするなよ

「私と姉さんは、どんなマスターも大好きです？」

「実は人殺しかもしれないぜ？」 「それで

も大好きです」 「そこは嫌いになってもらいたいんだが…」

リスキーな妹だ。 「それにマスターがそんな殺伐とし

た人なら、私のダメ姉さんはあんなにふわふわしていません」

「…そーだな」 その通りだ。 俺は大

きく息を吸い込み、自分の考えが間違ってないを考える。

重度のお人好しにして、極度のおせっかい。 春風

薫と繋がる方法はこれで間違っていないかを考えて 吸い込ん

だ息を、喉を震わせるために吐き出す。

力強く。 「春風！！今困ってた、助けてくれ！

！」 瞬間。 俺とあいつの間に、

光が弾けた。 「…ありがとうございますマスター。」

ラインを確保致しました。次は私の番ですわね」

伶俐の髪が踊りだす。 それは風が吹き上げるように舞い、

やがては光と戯れる。 光の中に1と0の羅列

が浮かぶ頃、輝きが強さを増して視界を塗りつぶす。 「…

ゲーム、スタート」

物語がいつ始まったかはわからない。

けれど、

俺が事件と呼んだ喜劇は、この瞬間に始まった。

## ワールドマップへウィンフィールド

あまりの眩さに両目を覆う。

光の世界に

生きているはずの人間が輝きに目を閉ざすのなら、闇の世界に生きる怪異にも目をこらす暗闇があるのかな、なんて益体のないことを考えていたら、視界を包む光が弱まってきたのでそれに合わせて少しずつ目をあける。そこには、どこまでも続くただっ広い野原があつた。

「…なんだこりゃあ…。ここが春風の心の中なのか？」

「いえ、厳密

には少し違います」

俺の疑問に、大気が震えて答える。

「それは怜悯の声だったけれど、本人がどこにも見当たらない。」「怜悯か？どこにいるんだ？」

「それにここが春風の心じゃないって…じゃあここはどこだ？」

「ここは春風の心じゃない…でも。」

あの妖怪変化は、間違いなく春風だった。あんな状態になってまで俺の「助けてくれ」発言を真に受けて、力になろうとする馬鹿なんて 春風しかない。自分を省み

ないというか何というか…自分の命さえ、平気で他人のために使ってしまうやつなんだ。この分だと、あるいは自分のことを殺そうとしたやつを弁護をしたという噂も嘘じゃないのかもしれない。

「はい、ここは春風さんとマスターの命を基盤に春風さんの心で創り上げた私の能力空間です」

「人の命をなんだと思ってるんだ!!」

俺の命を勝

手に使うなや!いや春風のもだけど! あいつのことも言えない…俺が他人のために命を使うやつになってしまった。『私の能力は本来、対象を私の中に捕らえるだけの能力です。鏡の怪異に多い能力ですね。しかし私は鏡と違い、プログラムを少しいじればその性質を変えられます』

「性質を変える?どういう

ことだ?」

『簡単にいうと、条件を満たせば怪異に

魅せられた人を助ける能力として使用できるということです」

「伶俐が俺の質問に簡単に答えると、空間に淡く輝く文字が浮かび上がる。」

ラスボスの撃破

死亡条件

敵に殺される

「死亡条件って何だアアア！え！？敵って何！？しかも殺しにくいの！？おまけにラスボスとか、RPG気分ですかコノヤロー！」

「はい、これはマスターを主人公としたRPGです」正解だった！

「いや待てエエエ！俺は喧嘩さえしたこと  
がねーんだぞ！それがいきなりRPGでファンタジーな冒険できる  
ワケねーだろ！サファリパークにハムスターを放り出したようなも  
んだよ！」  
「大丈夫です。戦闘はプレイヤーがコマンドを選べば、  
プログラムがマスターの動きを最適化しますので、通常の3倍のス  
テータスで行動できます」

「ロボットアニメの金字塔  
で有名なワードだけど、どこで覚えたんだ？俺は教えてね  
ーぞ。」

「ちなみに、そのコマンドって誰が選ぶんだ？」

「それは…」

「はいはい！あたしあたし！あたしがプ  
レイヤーだよ！」

「デッドエンド確定じゃねー  
か！！ご愛読ありがとうございます！」

「何であたし  
がプレイヤーだとデッドエンドなの！？大丈夫だよ、俺たちの冒険  
はこれからだー！だよ！」  
「それただの打ち切りイイイ！お  
い  
伶俐大丈夫なのかこれ！？俺生きて帰れんのか！？」

「正直私も不安なのですが、私はゲーム機本体ですのでプ  
レイヤーにはなれません。他に誰もいないので、申し訳ありません  
が我慢してください」

「うう…にーちゃんと妹がいじ  
めるよう…」

俺の後ろの大きな窓（おそらく伶俐改め  
PSPの画面なのだろう）から見えるぐみがいじけた。

それは無視して、何とか自分の意思で動けないかと伶俐に聞いて  
みる。  
「…申し訳ありません。マスターは今、いわばフリー  
ズした状態なのです。心の中に別の心が侵入してくることは受け入

れ難いものらしく、今現在もすごい力で拒絶されています。例えて言うなら、ここは台風の暴風域のようなもので、この空間に存在し続けること自体が難しいんです」

「……………」

人の心に不

めっちゃ嫌われているということらしい。

法侵入しているのだから当たり前なのだけれど、軽くシヨツクだ…」

「なのでマスターの命は基盤に使用し、心は私…つまりゲーム機本体のプログラムと癒着させることでマスターの存在をこの世界に縛り、外部入力で動くように設定しました」

「なるほどね…」

うまい例えは見つからない

けど、話を聞く限りかなり無理矢理侵入しているらしい。

「話をまとめると、この世界はつまりお前がロードしたゲームで、俺が主人公、ぐみがプレイヤー。メインの素材は春風の心だから、俺たちがゲームをクリアすれば春風は元に戻る…そういうことだな？」

「その通りです」

ふむ。そしてプレイヤーの協力無しにはクリアできないと。もどかしいな…RPGの主人公はこんな気分なのだろうか。となると、今やるべきことはぐみの機嫌をとってゲームをやってもらうことか。

さてどうするかと考え始めた頃。

てきがあらわれた！

「はアアア！？何でエエエ！

？まだ一步も動いてねーぞ！？」

「まあ、

便宜上ゲームに例えましたが、ここは春風さんの心の中ですからね。体内に雑菌が侵入すれば、白血球が群がるのは当然です」

「俺は雑菌ですかそうですか…！」

この妹は兄が嫌いなのだろうか。

泣き出し

たい衝動を抑え、ぐみに協力を要請する。「ぐみイイ！…！にーちやんが大ピンチだ！助けてくれエエエ…！」

情け

ないとか気にならない、こっちは切実に命が危ないんだ！いや正確には心が危ないか？どっちも変わらん分らないなら一度誰かに襲われてみる！

「…もう、いじめない？」

若干幼児退行した様子のがみは涙目で聞いてくる。俺としては襲われる恐怖でいつ

ばいっばいなので、ぐみの発言をよく聞きもしないで全肯定する。

「ああいじめない！だから助けてくれ！」

「ああいしてる？」

「ああいしてる！だから助けてくれ！」

「ああいしてる！だから助けてくれ！」

「ああいしてる！だから助けてくれ！」

「ああいしてる！だから助けてくれ！」

切羽詰まっていたから自分が何を言ったか覚えてないが、どうやらぐみの機嫌はなおったようだ。代わりに倫理観を失った気がするが、たぶん気のせいだろう。

「へ？何を？」

「とぼけないください。私だって春風さん救出に貢献しているのに、姉さんにだけご褒美があるなんてずるいです。対等の報酬を要求します」

「いいよ、わかった。報酬の要求は正当な権利か。」

「対等って言ってたけど、ぐみと同じ内容でいいか？」

「いえむしろそれをお願いします。絶対ですよ約束ですよ」

「わかっただけでいいよ、わかった。約束の対等って言ってたけど、ぐみと同じ内容でいいか？」

「ああいしてる！だから助けてくれ！」

「ああいしてる！だから助けてくれ！」



のにーちゃんの力、とくと見よー！」 「見せなくていいよ

！伶俐、お前から何か言っちゃってやってくれ！」 『マス

ターは姉さんだけのものじゃありません』 「そこじゃね…」

たたかう ひびっ まほう ど

うぐ にげる 「ぎゃあああああ！

！」 やりやがった！ あいつマジでやりやがった！

いる！ 昆布大好きAは美味しそうに昆布を食べて  
だろ…俺これからあんな無垢なやつを攻撃するの！？マジで！？」

『いけーっにーちゃん！』

りんりのこうげき！ がっっ！ 「生々しい！

殴った感触がすごく生々しい！」 昆布大好きBに43のダ  
メージ！ 昆布大好きBをたおした！

「昆布大好きBイイイ！」 罪悪感で死ぬそうだ

！ 昆布大好きAはげんじつにおいてけないでいる！ 「反応が  
リアルなんだけど！これ端から見たら俺難見沢症候群の発症者じゃ

ねーか！」 『ひあーついごー！』 たた

かう ひびっ まほう どつぐ

にげる 「あれを見た上でのたたかうコマン

ド！？お前は鬼か！！」 『違うよー！あた

しは、九十九神だよっ！』 「嘘だツツツ！！！！！」

『またひぐらしですかマスター』 昆布大好き

Aは昆布大好きBのからだをゆすった！ へんじがない…ただのし  
かばねのようだ。 「やめるオオオ！！そんなリアルな反応

をするなアアア！！殺人鬼になったような錯覚を覚えるだろうが！

！」 りんりのこうげき！ がっんっ！ クリ

ティカルヒット！ 昆布大好きAに57のダメージ！

昆布大好きAをたおした！ 「昆

布大好きAエエエ！！」 『やった勝ったー！』 「あれに勝って

嬉しいかチクシヨー！」 昆布大好き（ちなみに敵

の名前だ。）たちを殴った感触が生々しく両手にまとわりつく。

ゲームをクリアするまで、人間でいられる自信がなくなってきた…。

「伶俐：あれは本当に俺に追い出しにきた白血球なのか…？」

「そうは言っても春風さんの感情ですからね、彼女たちは。戦闘の概念自体がないのかもしれない」

「ちよつと待てエエエ！！え！？あれ春風の感情！？」

「じゃあ俺は、春風の昆布大好きという感情を殺したということか…！？」

「大丈夫です。感情はそんなに簡単には死にません。心のない私たち怪異にさえあるものですし、眠ることはあつても死ぬことはないです」

「お前が言つと信憑性が薄れるな…」

いつも無表情だし。 けどまあ、妹の言つことを疑う兄ではない。 伶俐の話信じよう。

「べ、別にあの2人は眠っているだけだと信じたいわけじゃないからな！」

「おー！やったー！アイテムだー！経験値少なかったけど、アイテムくれたから許す！」

「許す許さないはお前が決めることじゃねーだろ」

「どちらかといえば被害者が加害者に対して言うセリフだ。」

「じゃあ、先を急ごうぜ。あんなのと戦つてたら心がいくつあつても足らねーよ」

「ふう…我が兄ながら情けないにーちゃんだぜ」

「いつぺん無実の人間を虐殺してから言いやがれ」

「本当は一度でもやつてはいけませんけれどね」

「お前が俺を放り込んだんでしようが！」

「春風を戻すためには仕方なかったとはいえ、やつぱり不満は拭えない。だって、あいつらに罪はなかったじゃないか！」

「あ！」

「てきがあらわれた！」

「出たアアアアアア！！」

「いよおつし！かかつてこーい！」

「逃げろお前らアアア！！」

「お人好しAがあらわれた！お人好しBがあらわれた！これ普通に春風じゃねーか！服装がファンタジー仕様なこと以

外何の違和感もなく春風だよ！」

「う…確かにこれを攻撃

するのは気が引けるねえ…」 「そうだろ！？悪いことは言わねえ、  
今すぐ逃げよう！」

よかった…！ぐみに

も知り合いへの攻撃を躊躇う程度の良識が残っていたことも含めて

たたかう

ひピッ

まほう

どつぐ

にげる

「悲しい

けど…これ、戦争なのよね」

「こんな場面でお前が

言うなアアア！！」

さっきまでの俺の感動を返せ！

お人好しAはニコニコと笑っている！

お人好しBは興味津々のようだ！

りん

りのこうげき！

がつっ！

お人好しAに45

のダメージ！

お人好しAをたおした！「お

人好しAエエエ！！」

お人好しBのひょうじょうがきょうふに

そまる！ ちきしょう…またなのか！？また俺は同じ過ちを繰り返すのかよ！運命の袋小路からは逃れられないっていうのか！？

「マスター、ひぐらしネタ使いすぎじゃないですか

？」

うるさいだまれ何でひぐらしってわ

かるんだよ。 『マスターが私を机の上に放置して熟読していたマ

ンガですから』

「……………」 「姉さんがいないとき

とかは音読もしてましたし」 「今言わなくてもいいだろ！？」

たたかう

ひピッ

まほう

どつぐ

にげる

???+??イ???!! ( 声にならない悲鳴 ) 「…あたし以

外の書物を音読した兄ちゃんが悪いんだよ」

いつもそうだけど、何で音読が浮気みたいな扱いになっ

!?書物( 絵本 )の九十九神だからか!?書物( 絵本 )の

九十九神の世界観では音読が浮気なのか!誰が妹と付き合うかボケ

エエエ!!

お人好しBはなにかをけつ

!

お人好しBはほほえみ、りょううでをひろげた

! 「ん?何だありゃあ…」 「もしやカウンター攻撃では…?マ

スター、気をつけてください』  
「カウンター…。はは  
っ、そうか、戦う気になってくれたか…」  
『相手に

攻撃されて安心しないでください』  
「そりゃ安心もするだ  
ろ。ファンタジー春風が戦ってくれるおかげで、俺の罪悪感が和ら  
ぐんだ」  
ただ、なぜだろう…：ひぐらしファンの第六感が

警報を打ち鳴らしている…。  
りんりのこうげき！  
カウンターはつどう！  
「いよっしゃギター！」  
『攻撃されて喜ばない  
ですよ…』  
お人好しBはやさしくほほえみセ

リフをはなつた！  
「へ…セリフ？」  
お人好しBは、俺の  
攻撃を避けようとせず、両腕を広げたまま優しい微笑みを俺に向  
けて  
『だいじょうぶ。わたしはあなたをいじめないよ』  
がっつ。

「アレンジ入ってるううう！！」  
あんなに優しい女子  
を殴って開口一番が「アレンジ」な自分に絶望した！  
てか春

風もひぐらし知ってるのかな…元に戻ったら聞いてみよう。  
お人好しBに49のダメージ！  
お人

好しBをたおした！  
「もう…涙も枯れ果てた」  
『にーちゃん、ちょ  
っと見ないうちに影が似合うようになったねー』  
テキ  
トーなことを言うな。  
ほとんど実行犯じ

やねーか。  
『んー、やっぱり経験値が少ない  
な…。あと何体倒せばレベル上がるんだろ』  
「ちよつと待て！お  
前まさか俺のレベルなんかのために、無垢で無実な春風を無慈悲に  
も殺すつもりか！？」  
『だって、レベル低いとあとの戦闘がめんど  
いし…』  
RPGってそういうものだと思うんだけど…とか。  
「い  
やっ…低レベルクリアっつーチャレンジもあるだろう！？」

『めんどいからヤダー』  
「それ言ったら、あいつらだ  
つてたいした経験値くれないんだろ！？  
だつたら先に進んでそこで  
レベル上げすれば…」  
てきがあらわれた！

「ぐぎやアアアアア！！」  
『なんだか、マスターのほうかモンス  
ターっぼくなってきましたね』  
「ほつとけチキショー！

「!

とか。

そんな

感じで一通り修羅の道を歩いた後、俺たちは最初の町に訪れた。

町の名前は、ペルソナタウン。

## 最初の町へペルソナタウン

『いやあーでも面白いよねえー…この町の人って、1人残らず春風さんなんだよ!』

「仮面の町…か」

『春風さんの表層…私たちもよく知る、普段の春風さんの部分ですね』

『無視しないでよー!泣いちゃうよー!?!』

「ネーミングがあざといっつーか、露骨だよな。」

『そうですね』

『あたし的には、2人の無視のほうか露骨だよ…』

町に入り、教会に行つて懺悔をした後、春風だらけの町でなぜかテンションがうなぎ登りのぐみをなだめた後、宿屋で一息ついたところで、俺と怜悧はそんなことを話した。

俺たちと話していた春風は、どこまでが建前だったのだろうか。そんなことを勝手に考え、勝手にテンションを下げているところだった。

『まーそんなこと考えても仕方ないよ!それより、装備を整えに行くよ!ここから先の敵も攻撃してこないとも限らないし!』

「それもそうだが…」

このまま戦い続けていたら、いつか本当に人間味を失いそうで怖い。

さつきはギャグで流されたけど、無抵抗の敵…敵でさえない相手を一方的に傷付けるのは、かなり気分が悪い。

だからだろう、心が少しずつ鈍くなっている。

何かを感じることを 放棄しつつある。

『…あたしのせい?』

画面越しに、不安そうな瞳を向けてくるぐみ。心配してくれているのか、一応は自分が悪いと思っっているのか。なんて、言うまでも

なく両方だろう。

「いや…お前は、まあそんなに悪くない。俺が、お前の選んだコマンドに従わなければよかったんだから」

あのコマンドは、選んだ行動が最適化されるといっただけで、選んだコマンド以外の行動ができなくなるわけじゃない。

戦闘中は、基本的には自由なのだ。

『だったら何で攻撃したの？』

『あの戦闘においてマスターの行動が、最適化された《たたかう》コマンドでも後攻だったことを覚えていますか？』

『えーと…そうだったかも』

『つまり、素早さにおいて絶対的にこちらが遅れをとっているのです、素早さだけに。最適化されたコマンドでそれなのに、選ばれていない《にげる》コマンドの行動をしても…』

逃げられない。

戦闘は終わらない。

「だから弱らせたなら逃げてくれるかもって思ったんだが、そうすると今度は俺があいつらより圧倒的に強い。相対的に、あいつらが弱いとも言えるが…」

『その両方でしょうね。彼女らは、戦闘を前提としていなかったようですし…』

『…そうだったんだ…わかったよ』

「？わかったって何が…」

『次の戦闘からは…《まほう》コマンドを選ぶことにする！』

「本当に何が『わかった』んだ!？」

『だって《たたかう》だとーちゃんが強すぎるんだよね？だって他のコマンドを選ばばーちゃんは弱体化して、あの子たちが生き残れるかもしれない』

「戦わずに逃げるといっ選択肢はないんだな…」

意地でも戦うつもりか。

『それでもし相手が逃げなかったら《たたかう》でいいよねっ!』

「戦わずに逃げる！！俺がどうなってもいいのか！！」

人類史上なかなか類を見ない、自分を人質に要求を通すというチャレンジをするRPGの主人公だった。

いや俺なんだけど。

さすがにこれは冗談だが（他人事みたいに『お好きなように』』と言われて終わりだろう）、彼女らと戦いたくないのは本気の本音だ。ここはゼリー辺りをエサに『にーちゃんが人質じゃ仕方ないね…』「要求が通っただと!?!」する必要はなかったらしい。

うちの妹は春風の次くらいに優しい心の持ち主だった。怪異だから簡易タイプの心だけだ。

俺を気遣える心があるなら何であの時たかこのコマンドを選んだんだ…。

しばらくネチネチと恨むからな。

『まあでも、装備は整えておこつよ。さっきも言ったけど、会う敵みんながあの子たちみたいに大人しいわけじゃないだろうし』

「確かにそうだな」

いくら何でもボスマであんなんじゃないやダメだろう。

ゲーム的っつーか、人間的に。

優しさ以外の感情が無いようでは、それはもう感情自体が無いのと大差ない。

『さすがに言い過ぎだと思いますが、概ねその通りだと私も思います』

『話はまとまったね！それじゃまず武器屋に行こつか！』

「戦う気満々か！」

効果音が《がつんっ！》から《ざくっ！》に変わることになるみたいだ。

『もちろん防具も買うよー！レベル上げのときにいっぱいお金もたまったし！』

「……………」

俺はこれからどうやら、再び自分の良心と戦わねばならぬらしい。



『いやー買った買った！バリバリ買った！アクセサリまで買ったやつたよー！』

「代わりに俺の良識がごりごりすり減ったけどなあ！」

諸君らに伝わっているだろうか…抵抗も対抗も出来ずに、無垢だったあいつらを一方的にぶちのめしてぶんどった金で買い物をするこの罪悪感が。

かつあげどころか傷害強盗だ。

『装備品からしてそんな感じですしね…。姉さん、何でこの装備を選んだんですか？』

『え？かつこよくない？』

「……………」  
武器 釘バット

頭防具 ニット帽

足防具 スニーカー

アクセサリ1 グラサン

アクセサリ2 マスク

……………。

「ただの不審者キットじゃねーかアアア！！」

『コーデイナーに悪意を感じますね…。姉さん、分かっててやってません？』

『はてさてナンノコトヤラ？』

「……………」

ぜってーわざとだ。

何か日頃の恨み的なオーラを感じるけど、心当たりがない。

『あとは道具屋に行って終わりだね』

「嫌だ」

『もー！まだごーとーしょーがいがどーとか言ってるの！？これは

ただのRPGなんだよ!」

「無論あいつらからぶんどったお金を使うのも嫌だけど、何よりアイテムを買うのが嫌なんだよ」

「しかし、マスターは現在回復系の魔法を習得していません。舞台が敵との連戦が前提のRPGである以上、回復アイテムはそれなりに所持しておくべきかと」

「その回復アイテムが嫌なんだろうが!」

皆さんは覚えているだろうか。昆布大好きと最初に戦ったとき、彼女らがアイテムを落としていた。正しく言えば「ぶんどった」なのだろうけれど、( ) ことを。

後で確認してみたら、それは回復アイテムだったのだ。

名称は乾燥昆布。

：だから何で春風は何にでも昆布を持ち出すんだよ。こっちはもう見たくもねーんだよ。

昆布弁当のせいで、あれ以来若干トラウマなんだよね。

「そんなぜーたく、言ったられないでしょう!? にーちゃんはゲームオーバーと昆布祭り、どっちが嫌なの!？」

「そりゃゲームオーバーだけど…って待て!! 祭りって何だ!?! 場合によっては俺はゲームオーバーの方を選ぶぞ!」

「んじゃ! 話もまとまったところで、ひあーういごー!」

「くっ…足が勝手に…! だから祭りって何だアアア!」

俺の叫びを無視するように、マップ移動の主導権を握るぐみは道具屋に向けてアナログパッドを傾ける。

ホント、それぞれの主導権が逆だったら良かったのに。

「商人タイプの春風さんって、何だかハキハキしてるっていうかさバサバしてるっていうか…イメージがだいぶ違うよねえ」

「マジかよ…店頭で昆布弁当とか並んでやがったぞ…!?! ？てことは

つまり、先に進めば進むほどにあの悪夢は再現されていくのか!？」  
「…姉さん、貴女があんなに昆…回復アイテムを買い込んだせいで、マスターのトラウマがフラッシュバックしているみたいなのですが」  
「さつて！準備もできたし、次は次の目的地をこの町で調べるんだろっけど…」

「無視ですか。さっきのコーデイネートのことといい、姉さんは本当にマスターが好きなのですか？」

「いや待て…回復アイテムってことは、終盤はダメージを受ける度にあの昆布弁当を…!? だとしたらこれはもう悪夢どころの騒ぎじゃねえ…！世界を滅ぼす災厄、カラストロフだアアア…！」

「にーちゃん、あんまうるさいと今すぐ昆布使っよ？」

「……………」  
「姉さん、実はマスターのこと嫌いなんじゃ…」

「…伶俐もそのうち分かるよ…。何を言ってもごっこ遊びとして処理される無念がどれほどの…」

「…こういうときは何と言って慰めればいいのでしょうか…。私が同じ人のことをお慕いしている以上、この問題は他人事ではありませんせん…」

「……………」  
「ん？どうした2人とも。何かあったのか？」

トラウマスイッチから生還したら、妹2人がお通夜みたいな空気に沈んでいた。俺が昆布に怯えている間に何があったんだ。

「『別に』」

「……………」  
「すげえ目で睨まれた。」

まるで、事の張本人が無自覚なことを責めるかのような目付きである（伶俐の目は無論わからないが、そんな感じの雰囲気か辺りに立ち込めている）。

俺に心当たりは無いので、もちろん比喩だが。

「それで、買い物次はどうするんだ？俺は正直、この町に長居し

たくないんだが…」

『この世界はゲームと同じようにプログラムしてあります。なのでこの町のどこかに、ストーリーを進行させるイベントがあるはずですので…』

『つまり、片っぱしから話しかけたらいいんだね!』

「嫌だ」

『もー、にーちゃんは嫌って言うてばかりじゃない!好き嫌いする子は、大きくなれませんか!』

『何ですかその母親キャラ』

「だってお前、町人全員春風だぞ!?軒先で日向ぼっこしてるじいちゃんも道で遊ぶ子供たちも!老若男女1人残らず春風なんだぞ!さすがに気持ち悪いんだよ!」

春風の顔立ちが悪くない。むしろ整った顔立ちをしている。黒鬼が言っていたようなアブノーマルではない、普通のファンのほうが多いのだ(だからこそ俺は、あの日下駄箱に入っていたラブレターにあんな歪んだ願望が込められていたことが分からなかった…と)どうか知らなかったのだ(。)

しかし同じ顔が町単位で群がっていれば、どんなに良い顔立ちであろうと気味が悪い。

服装ぐらいいしか違いがねーもん。性別を分けるのも体つきの違いではなく、ズボンかスカートかの違いなんだぜ?

春風がってわけじゃなく、この町がキモい。

『そうは言っても、見分けがつかないからこそ、手当たり次第くらいしか手段がありません。早くこの町から出るためにも、どうか…』

「くっ…仕方がない、か…」

でもなあ…不気味なんだよなあ…。

ゲームの世界って設定だからか、みんな動きが機械的だし。…考えちゃいけないのは分かってるし実行に移すつもりもないけど、道行く春風のスカートを捲ったりとかって『やったらにーちゃんのこと発情期って呼ぶ』『そういうことは私たちでやってくだ

さい』「地の文を読むな！冗談だよ仕方ないだろ男ならみんな考えるんだってやらねーよ！」出来たとしてもやったら社会的に殺されるみたいなので忘れよう、そうしよう。

「…気を取り直して、手始めに村長の家みたいのを探るか。町だから町長とか王様か？」

『逃げられましたか、まあいいでしょう、取り直してあげます。私も、マスターの仰る辺りが妥当かと思えます』

『…次からは許さないからね。じゃあまず、それっぽい建物を探そうか』

そう言っでぐみがアナログパッドを傾けたとき。

「…待てぐみ。予定変更だ、何も探さなくていい」

『何で？…まさか』

「ああ…間違いねえ」

『ストーリーの進行とか丸投げにしてセクハラの限りを尽くすつもり！？』

『そうなのですかマスター！？』

「違エエエよ！おかしなモンを見つけたんだよ！」

お前らは自分たちの兄貴を何だと思ってるんだ！

普通にへこむだろうが！

『おかしなもの、ですか？』

「ん、ああ…。春風以外の誰かだ」

そいつは。

春風の2倍はあるロングの髪をなびかせ、そこにたたずんでいた。

春風の親切さを異常と評するなら、彼女はその存在が超常的だった。

達観したような穏やかな目に、膝裏のあたりにまで伸びた髪。

俺と同じくらいの身長は、春風の町の中では一際高く見える（頭の高さが均一なものも、この町の気持ち悪さの要因だ。工場で生産された人間を見てる気分になる）。

彼女がこの世界の何かであることが分かっているのに、俺は声をかけることを躊躇してしまう。

見るもの全てを圧倒するような儂い美しさを、彼女の横顔は湛えていた。

…まあ、いくら俺が圧倒されようと、マップ上での主導権はぐみにあるわけで、結果として俺は何の躊躇も躊躇いもなく声をかけたのだけだ。

「あつ、えーつと…」

しかし口を開くのは俺であり、何を話すか決めるのも俺の仕事だ。心の準備もないままに話しかけたので、何を話せばいいのかわからない。

自慢じゃないが、女子に自分から声をかけた回数なんて、片手があればカウント出来るくらいだからな！

「いやあああああ！？」

「痛あああああ！？」

殴られた。

凄い速さで殴られた。

「な…何こいつ…まさか、この訳の分からない世界の親玉！？」

しかも盛大に壮大な勘違いをされた。

てか訳の分からない世界って。お前このゲームのキャラじゃねーのかよ。

「とりあえず、まずは手足を千切って…」

「とりあえずで他人の手足を千切るな!!」

誰だこいつのことを「儂い美しさを湛えた少女」と評した奴は!

!野生の動物より猟奇的じゃねーか!!

「待てつて、別にラスボスでも不審者でもねーよ」

「……………」

めっちゃ白い目で見られた。

明らかに疑っている。

今にも「その格好でよくそんな白々しいことが言えるよね」とか

言い「その格好でよくそんな白々しいことが言えるよね」やがった

しかも一字一句全く違わずに。

「おいおいそいつは聞き捨てならねーな。俺の格好のどこが不審者

なんだよ」

「ニット帽を被ってマスクとサングラスを着けた人が釘バツを装

備していたら、それは不審者と言っていていいと思うけど…」

「……………」

仰る通りで。

そういや、ぐみの悪意あるコーディネートで、俺は今不審

者なんだった…。

背面の窓を睨み付ける。

ぐみは目を反らし、吹けもしない口笛を吹いて知らん顔をしてい

る。

…後で覚えてるよてめー。

「ちよつと!空を仰ぎ見て誤魔化さないでよ。結局、あなたは何な

の?」

「え?いや、空じゃなくて画面の向こうの妹をだな…」

「……………」

今度は「この人あれだ、頭怪我しちゃった人だ…」みたいな目で

見「この人あれだ、頭怪我しちゃった人だ…」るだけではあきたら

ず直接声に出しやがった。

止めるよ、傷付くじゃねーか。

「まあそれはさておき、道を聞きたいんだ」

「よくこの流れで道が聞けるわね…」

見知らぬ誰かは大きく溜め息をついた後、「それで、どこに行きたいの?」と聞き返してくれる。

ありがたいけどあれだな、この女子からは苦労人の気配がするな。

「この近くに洞窟とか森とかない?最近様子がおかしいとかって話があるとなお良いんだけど」

「それなら町の大通りを真っ直ぐ行くと洞窟があるわよ。そこに関して様子がおかしいって話は聞かないけど、そこに関して話す町人の様子はおかしいわね。どうもあの洞窟、『なかつたこと』にされてる感じがするっていうか…」

…教えてもらっておいて何だけど、さっきまで不審者と呼んでいた奴を相手にこうも色々と喋っていいのだろうか。

相談相手には不向きだな。

「…しかし、なるほど」

おそらくその洞窟で当たりだろう。

この町で『なかつたこと』にされているということは、俺たちの知っている春風が『なかつたこと』にした何か、その洞窟にはあるはずだ。

「でも、あんなところに何しに行くの?それにあそこ、町の人が入り口を固めてて中には入れないよ?」

「…マジ?」

「マジマジ」

またぞろバトル展開かあ…。

嫌だなあ…。今の俺がバトつたら完璧にアンダーグラウンドの間入りだよ( ビジュアル的に )。

「まあ、大した用じゃねーよ。うん、ホント何でもねーから。じゃ、道教えてくれてありがとな!」

「……………」



「だから何でもねーってばよ」

「その格好で『てばよ』とか言わないで、  
すげえ目で睨まれた。」

ナルトが好きなのか…？つーか何でゲームのキャラにそんなプロフ  
イールがあるんだよ。

このゲームは春風の心が素材なんだから、春風が好きだってこと  
かな。

「町で『なかつたこと』にされた洞窟に不審者がやってくるなんて、  
事件の匂いがするじゃない」

「うーん…」

不審者がやってきたんじゃないやなくて、やってきて不審者になったん  
だけだなあ…。結果だけ見れば、怪しまれて当然か。

「あんたが洞窟に訪れる正当な理由を教えてくれたら、私もあんた  
に構わないのだけれど」

「…理由ねえ…」

言っても納得しねえだろうなあ…。

ゲームのキャラでなくても「現実の知り合いの妖怪変化をどうに  
かするための手掛かりがあるかもしれないから」とか言われたら、  
最初に感じるのは憐憫だろう。

また頭の痛い子扱いされるのは嫌だ。

と、いうわけで。

「囚われの女子を助「ダウト」速えーよせめて最後まで言わせる！  
！」

まさかの支持率0%だった。

くそう、一体なぜ信用してもらえないんだ。

「まあ、仮に女の子を助けに行くっていうのが本当だったとして、  
その格好の男の子に助けられる身にもなりなさいよ…。不審者が恩

人とか、不登校確定もののトラウマよ」

「…そこまで酷い？」

「それぐらい酷い」 マジかー…。

何だよ良いこと一つもねーじゃん不審者装備。

「むしろどんなメリットがあると思っていたのよ…」

「しゃーねーな…。おーいぐみ！防具類だけでも元に戻してくれね

ーか？」

『ふゆー』

…いや、だから吹けねーなら止めるよ。正直見ている痛々しいんだよ。

つーかお前、今のが今回最初のセリフじゃね？

初セリフが『ふゆー』ってどーよ。

『…ところでマスター』

「ん？ああ、そういや…うん、何でもねーや、どうした伶俐？」

『何でもなくないですよ今完全に私のこと忘れてましたよね』

「えーと、それよりどうしたんだよ、ところで何なんだ？」

『流さないでください逸らさないでください今はそっちよりこっち

のほうで優先事項です』

「…いや冗談だよ、落ち着け。悪かったよ俺が悪かった」

『ではマスターにお詫びを要求してもいいですか？』

「良心的な範囲ならいいけど…それよりお前、俺に何か伝えたいことがあったんじゃないのか？」

『いえ、別に見知らぬ誰かが「うわ…電波系って初めて見た…」みたいな目でマスターを見ていたというだけです。そんなことより、お詫びというなら今度の日曜日に、買い物に付き合っして下さいませんか？』

『あーっ伶俐ばかりずるいよ！じゃああたしその次ねー！』

「……………」

「……………」

見知らぬ誰かが物凄く悲しそうな目で俺を見ている…。

そういやこの女子には画面窓が見えてねーんだから、そこに向かって話しかけたら完全に電波系として認識されてしまうことくらい、少し考えたら分かりそうなものなのに…。

「いや…待て、これはその…！」  
慌てて弁解を試みる俺だが、見知らぬ誰かの人差し指が、それを遮る。

そして彼女は、聖母のように優しい微笑を浮かべ、まるで子供をあやす母親のように暖かな眼差しを俺に向け、口を開く。

「大丈夫。それでも私は、あなたの味方だよ」

「何一つ大丈夫じゃねエエエ…！」

その後、とりあえず伶俐に2人と会話するための専用回線を繋いでもらった。

「この洞窟には入れません。お引き取りください」

「ほら、だから言ったでしょう？この洞窟には入れないって。ねえ、聞いているの？」

もちろん聞いている。

しかし、残念ながらそれどころではない。

今文字通り俺の目の前には、文字通り2つの選択肢が提示されているのだ。

『にーちゃん、どっちにするか早く決めてよー』

『この選択肢は時間制限付きのようです。あまりゆっくりとは考えられませんよ？』

わかっている、早く決めなければ時間切れになることくらい。ただ、どうだろう。この選択肢は、案外その時間切れが正しい回答のような気がするのだ。

だって。

「この洞窟には入れません。お引き取りください」

・邪魔をするなら容赦し ないぞ

・お望みとあらば靴の裏 も舐めます

「選択肢に悪意を感じるううう!!」

「……………」

見知らぬ誰かに「また発作か…」みた「また発作か…」いって早えーよそして何で毎回一語一句同じなんだよ。実はこいつ俺の心を読んでんじゃねーだろうな…。

そっぴい、この女子の名前まだ聞いてねーや。

『もー！決めないならあたしが決めちゃうよ!』

「ちよっ」

・邪魔をするなら容赦し ないぞ ぷっ

ぎゃああああ!!

やりやがったぐみのやつ!! どんだけバーサーカーなんだよ!

「ねえ、どうするの?」

ヤバい、この格好であんなセリフを言ってしまったら、今度こそこの名も知らぬ女子に犯罪者のレッテルを張られてしまう!

しかもあの選択肢には何らかの強制力があるらしく、いくら口を閉ざそうとしても、俺の意志とは関係なく言葉を紡ごうとするのだ。

「……………ッ!」

しかし全く抵抗できないというわけでもなさそうだ。

マップ移動時ほどの強制力ではないらしく、例えばセリフの内容は俺が決められるようなのだ。ただし、ここでも時間制限があり、それを過ぎるとは自動的にあの選択肢のセリフを喋らされるみたいだ。…曖昧な表現ばかりで申し訳ない限りだが、俺も初体験なので勘弁してほしい。

とにかく俺がやるべきことはどうやら、時間内に選択肢のセリフをソフトな言い回しに変えて話すことらしい。

バトルパートに入るのもやむを得ないと思わせるセリフ回しを考え出さないと、俺が何でも暴力で解決しようとするやつみたいになる…。

この格好でそのキャラは致命的過ぎだ。 どうせゲームの中だし、気にすることねーじゃんと思う人もいるかもしれないけど、当人的にはそうもいかないのだ。

自分がそういうキャラだと思い込んでしまうと、そういう行動を取るようになってしまう。

怪異のキャラクターが、人間の認識に左右されるのと同じだ。 あるいはその逆というべきか。

だから俺は考えた。

俺が犯罪者にならない言い回しを、RPGの主人公に足るセリフ回しを。

そして、浮かんだ1つのセリフ。

俺はそれを、主人公らしく、明るく、元気に、声に出す。

「レッツパーリイイ!!」

「見知らぬ不審者が狂気の犯罪者にジョブチェンジした!？」

見知らぬ女子が引いていた。

実に実に。

どうやら俺は、セリフのチョイスを間違えたらしい。

拒絶Aがあらわれた!

拒絶Bがあらわれた!

「まーた露骨なネーミングだな…」

「てか何で私もこのバトルに参加してるの?」

「共犯だと思われてんじゃね?」

「不名誉極まりない!!」

うん、ごめんね巻き込んで。

『どうしようにーちゃん、逃げるのコマンドが選べない!!』

『てことはボス戦なんだろう？だったら仕方ねーさ』

つーか、一応約束を守ろうとしてくれたんだな。

まさか俺が人質としてここまでの力を持っていたというのか？

いやいやまさかねえ。

ブラコンじゃあるまいし。

『いいの!?!いいんだね!?!後で「あんときたたかうコマンド選んだからご褒美は無し」とか言わない!?!』

『言わねーよ!見知らぬ女子のほうは仕方ないにしても、何でお前からの支持率も0%なんだよ!』

怜悯もそうだったけど、こいつらはどんだけ俺がそのご褒美とやらを撤回することを危惧しているんだ。

内容がキスをするとかならまだしも、約束した以上は撤回なんかしねーよ。

たたかう ひびっ

まほう

どつぐ

にげる

ぐみがコマンドを選び、それによって俺の動きが最適化される。最初に動いたのは俺。

どうやら《拒絶》は《お人好し》ほど速さがないらしい。

がつんっ!

拒絶 A に55のダメージ!

「……………うわ」

「リアルに引かないでくれよ!傷付くじゃねーか!」

「…釘バットで女の子を殴ったんだから、傷付いておきなさい」

そう言っただけ彼女は、自らの武器を構え、攻撃的な目をした春風

《拒絶》に銃口を向けて、引き金を引く。

ドンッ！

拒絶Aに48のダメージ！

「あれ？まだ死なないんだ…。面倒くさいなあ」

「俺以上に反省点満載じゃねーか！」

「まだ死なないんだ」って言ったぞ！自分が銃撃した相手が立ち上がったのを見て「面倒くさい」とか言ったぞこの女子！

「えー？戦闘中にそういうこと気にするー？器が小さいなあ」

「拳銃で女の子を狙撃したんだから、少しは傷付きなさい！」

「私はいいのよ！あんたと違って可愛いから！」

「お前絶対女子の友達いないだろ」

「何で知ってるの！？」

「誰でもわかるわ！！」

自分の容姿を理由に好き勝手やるやつが同性からの反感を買うのは、あらゆる作品で使い古されたパターンだ。

人のこと言えねーじゃねーか。

「…うん？今のにーちゃんの言い分、妖怪変化の正体を見破ったあたしの論理とほとんど同じなような…？」

「さーて気を引き締める、あいつらの攻撃がくるぞ！」

「え？あ、うん…どうしたの急に。何かを誤魔化すみたいな口調になってるよ？」

拒絶Aのこうげき！

「……………っ！」

「にーちゃん！大丈夫！？」

「っああ、平気だ…っ」

りんりに16のダメージ！ 拒絶Bのこうげき！

りんりに14のダメージ！『マスター！』

『大丈夫だつて、体力はまだ 3/4 近くある！』

不本意ながら、この町に入る前にレベル上げをしていたおかげで、ダメージはそんなにない。このペースなら、敗北の心配はほとんどないだろう。

「だとしても、結局攻撃を食らっちゃうのは変わらないでしょう？ あんたがボコられる分にはいいけど、私が攻撃されたら嫌だし……」

「自己中の見本みたいな女だなお前は！」

「いやあそれほども〜」

「誉めてねーよ！懐かしいなそのセリフ！」

「にーちゃん、楽しいお喋りもけっこうーだけど、今は戦闘中なんだからね！」

「ん？ああ、わかってるけど……」

どうしたんだ？何かピリピリしてるような……。

「それよりさ、あんた何か大きいダメージが期待できるスキル持ってるない？」

「スキル？そーいやりレベル上げのときに何か覚えてたな……」

ステータス画面を呼び出し、魔法の項を確認する。

・まほう

フルスイング

……………。

いやいやいや。

とりあえず、魔法じゃねーじゃん。

「ん？魔法使うの？りょーかい、任せてー！」

たたかう

まほう

フルスイング ムピッ

どうぐ

にげる

「ちよつと待てエエエ！この格好でそのスキルはだめだろうー！この小説年齢制限かけてねーんだぞー！」

今はまだ戦闘中の描写に関する苦情みたいなものはきてないけど、



さすがにこれは…

「でもあんた、さつきも釘バットであの子を殴ってたわけだし、そんなの今更じゃない？」

「お前あんとき引いてたじゃん！何で肯定側みたいなたんすなんだよ！」

「この世界で生き残るためにはね…綺麗なままじゃ、いられないのよ」

「騙されない！そんな風にそれっぽいことを言っても、俺は騙されないぞ！」

「それにこういうのって、血がドバーツとかブシャーツとかならなければ大丈夫なんでしょう？コロコロコミックのギャグ漫画には、キャラクターが車に轢かれて死ぬとかが日常茶飯事な漫画があるわよ」

「現実と漫画を一緒にするな！あれはギャグだからまだ許されてるんだよ！」

「でんじゃらすじーさんとか、あれ普通に大量の吐血をしてるじゃない」

「実名を出すな！あれはだからあくまでギャグタッチだから許されてるんだって！」

…でも確かあの漫画って、シリアスな長編もやってたよな…。だとすれば、何か他の基準があるのかもしれない。

素人がいい加減なことを言っちゃいけないよな。

「とーにかーくー！血が出るわけでも相手が生々しく大怪我するわけでもないんだから、サクツと殺っちゃいなさい！」

「殺るかアアア！！殺ってたまるかアアア！！そこは越えちゃなら「ええいうるさい黙れさつさと殺らないなら私があんたを殺る」見知らぬ女子が劇的ビフォーアフター！！」

最初に不審者ルツクの俺に引いてたお前はどこに行っただ！？まああのキャラが戻ってきててもひたすら引かれるだけだから「帰ってこい」とは言わないけどね！

「く…っ！負けるかよ！そんな安っぽい脅迫に、俺は屈しな…」  
「かちやつ。」

「仰せのままに、マドモアゼル」  
「…いや、待て。まず言い訳をさせてくれ。」

「だつてあれ、返事があと少し遅かったら発砲してたぜあいつ！目が据わつてたもの！有言実行の信念がピリピリ伝わってきたもの！仕方ないじゃないか、殺らなきゃ俺が殺られるんだ！」

「りんりのこうげき！」

「りんりはまほう、フルスイングをつかった！」

「ごっ！！」

「拒絶 B に 101 のダメージ！」

「拒絶 B イイイイイ！！」

「許してくれ…！弱くて弱々しくて弱つちい俺をどうか許してくれ

…！

「なかなかやるじゃない！これならまとめて倒せるわ！」

「謎の少女のこうげき！」

「謎の少女は機関銃を掃射した！」

「ズガガガガガガ！！」

「拒絶 A と拒絶 B はまとめでデスった！」

「デスったって何イイイ！？」

「死んだってことでしょ？」

「わかっている！わかっているけどよ…！！」

「わざわざ面白く言う必要ないじゃん！これじゃあの2人は、あのギヤグ1つのために命を奪われたようなもんじゃないか！！」

「繰り返すようですがマスター、彼女らは感情ですので、命なんて最初から持っていません。この世界での戦闘はいわば心の葛藤と同意です。感情を押さえ込むなんて、誰でもやっていることでしょう」

『？』

『…にーちゃんにとっては、そういう問題じゃないみたいだね…』

「ほらほら、何を放心してんの？私たちの冒険は、まだまだこれか

らよ!」

「俺は…なんて無力なんだ…」  
こうして。

打ち切りされた漫画の主人公みたいなセリフを言う女子に曳かれて。

俺は春風が『なかったこと』にした、心の奥へと足を踏み入れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4821w/>

---

RPG始めました

2011年10月11日08時52分発行